

久下前遺跡第3地点発掘調査報告書

—市道8501号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成14年

埼玉県本庄市教育委員会

久下前遺跡第3地点発掘調査報告書

— 市道8501号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

平成 14 年

埼玉県本庄市教育委員会

序 文

高崎線本庄駅の南口を出て、駅前通りを真直ぐ南にしばらく行きますと、にぎやかな街並みがとぎれ、一面に水田が広がる場所へと出ます。南には前山と呼ばれる丘が見え、松林の向こうには大久保山の深い緑が目に入ります。久下前遺跡は、水田の広がる川沿いの低地と丘陵を目のあたりにする微高地の端にある遺跡であります。

また、久下前遺跡の周辺は、同じ微高地の上に隣接して集落跡の久下東遺跡、西方には公卿塚古墳などの諸古墳があり、南側間近の前山には、宍勝寺北裏埴輪窯跡、北堀前山1・2号墳があるなど、遺跡の密集する一帯でもあります。

本庄市は、現在新幹線の本庄新駅建設に向けて全力で取り組んでおりますが、今回の発掘調査は、そうした新駅建設に関連する周辺整備事業にともない実施いたしました。新駅建設に必要な道路の改良工事という緊要性にかんがみ、事前の記録保存のための発掘調査を実施した次第であります。

本報告書は、その調査結果をまとめたものです。もとより道路の改良工事に先立つわずかな範囲の調査ですが、調査の結果は、本書がしめすように古墳時代前期から奈良・平安時代にいたる住居跡が高い密度で発見され、また様々な土器や土製の網おもり、鉄製品、石でできた秤のおもりなど、遺物も思いのほか豊富に出土しました。われわれの祖先の営んだ村々の生活を知るうえで貴重な資料をえることができたと思います。

この報告書が広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財に対する理解や、郷土の歴史についての関心が一段と深められるよう願ってやみません。

最後に、発掘調査、整理作業にあたって多大なご協力を賜った、関係諸機関、各位に対し、心から感謝の意を表す次第です。

平成14年3月

本庄市教育委員会

教育長 福島 巖

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市大字北堀1311の一部に所在する久下前遺跡の第3地点の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、上越新幹線本庄新駅（仮称）建設に関連する市道8501号線道路改良工事に先立ち、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査を実施した期間は、平成14年1月7日から同年2月1日までである。なお、今回の調査地点にかかる試掘調査は、平成13年9月25日に実施した。
4. 発掘調査の終了後、平成14年2月4日より引き続き出土資料の整理作業、報告書作成のための諸作業をおこなった。
5. 発掘調査および整理作業、報告書の作成にかかる組織は、下記のとおりである。

調査主体者

本庄市教育委員会

調査組織

本庄市教育委員会

教育長 福島 巖

事務局長 倉林 進

社会教育課

課長 田中 靖夫

課長補佐 福島 保雄（同和教育係係長兼務）

文化財保護係


係長 増田 一裕



主査 我妻 浩子

主任 太田 博之

臨時職員 松本 完

臨時職員 町田 奈緒子

6. 発掘調査に関しては、太田・松本・町田が担当した。
7. 発掘調査に必要な基準点測量および水準測量に関しては、昭和株式会社に委託した。基準点測量に用いた座標系は、第IX系座標系である。
8. 本書の執筆は、「I 調査にいたる経緯」を本庄市教育委員会事務局が、そのほかの執筆を松本がおこなった。本書の編集は、松本・町田がおこなった。
9. 挿図中の第1図は1/25,000地形図「本庄」（1995年、国土地理院発行）、第2図は1/2,500地形図（1989年、パスコ測量）にもとづき加除筆したものである。
10. 土層および遺物についての色調表現は、『新編標準土色帳』によった。
11. 遺構の挿図に関しては、住居址および住居址のカマドの平面図および断面図で、はカマド構築材の粘土やその密集部分、あるいはカマドの痕跡あるいはこわされたカマドなどに由来す

る粘土および焼土の集中範囲をあらわしている。遺物実測図に関しては、断面黒塗りは須恵器およびクロコ整形の土器を、は石製品の断面をあらわし、はフイゴの羽口に付着した鉄分をあらわしている。また、遺物番号の脇の▼は、掘り方出土であることをしめしている。

12. 土器観察表では、表現を簡略にした項目がある。「番号」としたものは、挿図番号と挿図中の遺物番号である（挿図番号—遺物番号）。「色調」については、以下の略号をもちいた。

A：2.5Y、5YRの「明赤褐色」、5YRの「にぶい赤褐色」、7.5YRの「にぶい褐色」

B：2.5YR、5YRの「にぶい橙色」、「橙色」

C：7.5YRの「にぶい橙色」、「橙色」、「浅橙色」、10YRの「にぶい黄橙色」

D：10YR、5Yの「灰白色」、2.5Yの「灰黄色」

E：2.5Yの「黄白色」、7.5Yの「灰色」

F：Nの「灰色」

13. 出土鉄製品、鉄滓に関しては、埼玉県埋蔵文化財センター 瀧瀬芳之・大屋道則両氏に撮影していただいたX線写真をもとに、実測図を作成した。

14. 写真図版原稿の作成は、増田・町田が担当した。作成方法は、ネガフィルムを、スキャナーでパーソナルコンピューターにとりこみ、画像処理した後、インクジェットプリンターで打ち出したものを印刷に付した。なお、写真図版にもちいた遺物写真は、町田が撮影した。遺物写真で遺物に付した数字は、土器観察表と同じく挿図中の遺物番号である。

15. 発掘調査および出土資料の整理、報告書作成にあたって、ご協力頂いた作業員の方々は、下記のとおりである。ここにしるして感謝の意をあらわす次第である（敬称略、五十音順）。

相田千代子、赤祖父瑞香、飯島嘉蔵、池田一彦、伊藤好雄、上田ニラモル、奥野節子、金井一郎、金井悟郎、金本みどり、門倉澄子、河田倫子、木島 覚、木村タツ、久保田かづ子、古指 茂、小暮慈樹、小林智恵子、近藤美雪、齊藤真理子、塩原忠治、塩原晴幸、高田和正、高橋辰馬、滝沢美知子、土屋牧子、福島清治、八木道良、柳川恵美子、山崎和子、吉田真由美、吉野ナミ

16. 発掘調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々および諸機関にご教示、ご協力を賜わった。末筆ながらしるし、感謝の意をあらわす次第である（敬称略、五十音順）。

荒川正夫、井上裕一、大熊季広、大屋道則、柿沼幹夫、金子彰男、恋河内昭彦、昆 彭生、坂本和俊、佐々木幹雄、鈴木徳雄、外尾常人、瀧瀬芳之、田村 誠、徳山寿樹、鳥羽政之、長滝歳康、福田 聖、松澤浩一、丸山 修、村田健二、矢内 勲

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 埼玉県埋蔵文化財センター 早稲田大学本庄考古資料館

目 次

序 文	i
例 言	iii
目 次	v
挿図目次	vi
挿表目次	vi
図版目次	vii
I 調査にいたる経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の立地	2
2 周辺の遺跡と歴史的環境	2
III 調査の方法と経過	5
1 調査の方法	5
2 調査の経過	6
IV 遺構と遺物	7
1 層 序	7
2 古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物	7
(1) 住 居 址	7
(2) 土 坑	29
(3) ピ ッ ト	31
3 遺構外出土遺物	31
V ま と め	33
引用文献および主要参考文献	35
図 版	

挿 図 目 次

第1図	周辺の主要遺跡分布図	3
第2図	久下前遺跡(第1～3地点)位置図	4
第3図	グリッド配置図	5
第4図	遺構全体図	6
第5図	1号住居址平面図および断面図	8
第6図	1号住居址出土遺物実測図	8
第7図	2・3号住居址平面図および断面図(1)	9
第8図	2・3号住居址平面図および断面図(2)	10
第9図	2号住居址出土遺物実測図	13
第10図	3号住居址出土遺物実測図	15
第11図	4号住居址平面図および断面図	16
第12図	4号住居址出土遺物実測図	16
第13図	5号住居址平面図および断面図	17
第14図	6号住居址平面図および断面図	18
第15図	6号住居址カマド平面図および断面図	19
第16図	6号住居址出土遺物実測図(1)	20
第17図	6号住居址出土遺物実測図(2)	21
第18図	7号住居址平面図および断面図	22
第19図	7号住居址平面図	23
第20図	7号住居址カマド平面図および断面図	24
第21図	7号住居址出土遺物実測図	25
第22図	8号住居址平面図および断面図	27
第23図	8号住居址カマド平面図および断面図	27
第24図	8号住居址出土遺物実測図	28
第25図	9号住居址平面図および断面図	29
第26図	1・2号土坑平面図および断面図	29
第27図	3～6号土坑平面図および断面図	30
第28図	3・6号土坑出土遺物実測図	31
第29図	遺構外出土遺物実測図	32

挿 表 目 次

第1表	1号住居址出土土器観察表	9
第2表	2号住居址出土土器観察表	14

第3表	3号住居址出土土器観察表	15
第4表	4号住居址出土土器観察表	17
第5表	6号住居址出土土器観察表	21
第6表	7号住居址出土土器観察表	26
第7表	8号住居址出土土器観察表	28
第8表	3・6号土坑出土土器観察表	31
第9表	遺構外出土土器観察表	32

図 版 目 次

図版1	久下前遺跡第3地点全景(南より)
図版2	1号住居址完掘状況(東より)、2・3号住居址全景(西より)、2号住居址遺物出土状況(1)(南より)、2号住居址遺物出土状況(2)(北より)
図版3	2・3号住居址完掘状況(西より)、4号住居址完掘状況(西より)、4号住居址P3遺物出土状況(南東より)、5号住居址完掘状況(北東より)
図版4	6号住居址全景(西より)、6号住居址完掘状況(西より)、6号住居址カマド(西より)、6号住居址権状石製品出土状況(西より)
図版5	7号住居址全景(西より)、7号住居址完掘状況(西より)
図版6	7号住居址カマド(西より)、7号住居址カマド完掘状況(西より)、7号住居址カマド土層断面(1)(南より)、7号住居址カマド土層断面(2)(西より)、7号住居址掘り方鉄製品出土状況(西より)
図版7	8号住居址完掘状況(南より)、8号住居址カマド(西より)、8号住居址土層断面(東より)、9号住居址完掘状況(西より)
図版8	1号住居址出土土器、2号住居址出土土器(1)
図版9	2号住居址出土土器(2)、2号住居址出土土錘、3号住居址出土土器、4号住居址出土土器
図版10	6号住居址出土土器・権状石製品
図版11	7号住居址出土土器・土錘
図版12	8号住居址出土土器・土錘・フイゴ羽口、3・6号土坑出土土器、遺構外出土遺物

I 調査にいたる経緯

本庄市は、群馬県に隣接する埼玉県北西部の中核都市で、人口は約61,000人を数える。古来より交通拠点の地の利が活かされ、経済・文化がいち早く流入する場所であった。これを反映するように埋蔵文化財も多い。現在では、関越自動車道本庄・児玉インターチェンジ、国道17号線、国道462号線や中山道、JR高崎線本庄といったアクセスを生かし、拠点法の指定を受け、各種整備事業が進行している。その一つである上越新幹線本庄新駅の建設事業は、本庄のみならず、児玉郡内の町村や岡部町、さらには群馬県の関係市町村が久しく誘致を推進してきた。

かかる事業予定地における「埋蔵文化財の取扱いについて」の照会文書は、平成13年12月25日付で、本庄市長より本庄市教育委員会教育長宛てで提出された。

協議の対象地は、新幹線新駅の建設予定地のみならず、駅前広場、駐車場、河川付け替え場所、仮設道路の建設なども含まれていた。該当する地区における埋蔵文化財の所在については、古墳址、集落跡等が所在し、また、広域な未確認の遺跡の範囲もあった。このため、保存計画立案のための範囲確認試掘調査を平成12年度より埼玉県教育委員会文化財保護課の指導を受け、本庄市教育委員会で実施した。

その結果、新駅建設予定地の大半に埋蔵文化財は所在しないことが判明した。また、新駅北側にかかる関連施設予定地は、かつて男堀条里が広がる地域であった。このため試掘調査を実施したが、無遺構・無遺物であった。当該地は昭和42年に北泉中部土地改良事業が実施されているが、当時は調査の対象とはなっていなかったらしく、条里遺構も確認されていない。ただし、北側の微高地は久下前遺跡の範囲内にあたり、今回の調査地点の試掘調査においても住居址等が確認された。

遺構確認深度は、30～50cmを測り、事業内容が仮設道路であることから、埼玉県教育委員会の埋蔵文化財保存基準に基づくかぎり、現状保存が可能であった。しかし、当該部分にかかる仮設道路の構造上、掘削と転圧を必要としたため、やむを得ず事前に発掘調査を行ない、記録保存措置を講じることとなった。

発掘調査にかかる手続きは、平成13年12月26日付本公社発第219号で「埋蔵文化財発掘調査通知」を本庄市教育委員会教育長より埼玉県教育委員会教育長宛てで発掘調査理由書を添付して提出した。

なお、当該遺跡周辺にかかる既往の調査は、西方の字久下東において昭和58年度に久下東遺跡(53-064)の発掘調査を実施しており、この時南側の試掘調査地点も久下東遺跡と呼称した。しかし、同地点は字久下前にあたり、遺跡地図でも53-065の範囲にあたるため、これをもって久下前遺跡第1地点と改める。さらに、それより東の隣接地を平成5年度に試掘調査している。ここは第2地点と命名した。その結果、今回の調査地点は、久下前遺跡第3地点(53-065)となる。

(本庄市教育委員会事務局)

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

久下前遺跡は、本庄市のほぼ中央南寄りの位置にある(第1・2図)。本庄市は、東西に長い埼玉県の北西端、利根川をはさんで群馬県伊勢崎市と境を接し、北関東の南端ともよぶ位置を占める。この地理的位置ゆえに、古代あるいはそれ以前より北関東と共通した様々な要素を文物にみることができ、また現在なお地理的環境、気候、風土の点で、群馬県域との強いむすびつきがみとめられる。

本庄市の地形は、利根川右岸の低地と市街地化の中心をなす台地および市域南端の丘陵の3つに分けられる。

低地は、利根川や烏川の氾濫原で、下流にひろがる妻沼低地、加須低地へとつらなる。台地は、いわゆる北武蔵台地の最北の本庄台地で、主に神流川扇状地と身馴川扇状地からなる複合扇状地性の台地である。神流川扇状地は、群馬県鬼石町浄法寺付近を扇の要とし、扇の端は本庄段丘崖を形づくっている。段丘崖や台地内の谷地には、伏流水の湧水点がまみられ、また変転した旧河道がきざみのこした大小の谷地形が台地内にはうずもれている。身馴川扇状地は、北西側を児玉丘陵に、南東側を松久丘陵、櫛引台地にはさまれた一帯である。

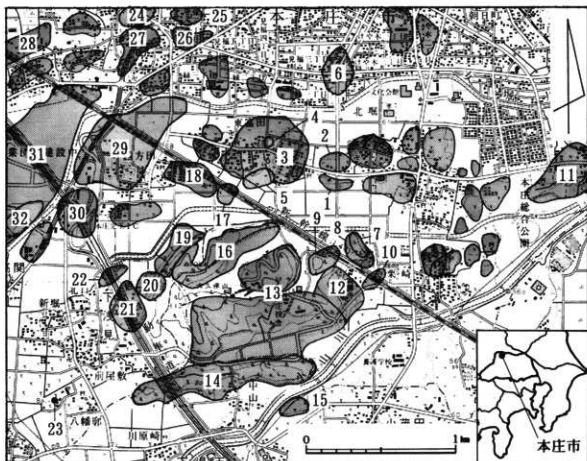
四周を見わたすと、南の上武山地の山々から妙義、浅間、榛名、北の赤城、男体などの諸峰とそれにつらなる山々が三方をとりまく光景が遠望できる。上武山地は、関東山地の北西につらなる山並みであり、その北東部は上記した児玉丘陵、松久丘陵へとなだらかに移行する。児玉丘陵はさらに北東へと伸び、第三系の残丘性丘陵である生野山、大久保山(浅見山丘陵)の2つの残丘をのこし平地へと転ずる。

以上略記した本庄市の地形のなかで、久下前遺跡は、本庄台地の南辺、男堀川と現女堀川に南北を画された東西に長い微高地上に位置する。今回調査の対象とした第3地点は、男堀川の形成した沖積地に南側で接する微高地の南縁にあたる⁽¹⁾。男堀川の沖積地をはさみ、さらに南側には、大久保山の北尾根、とくに前山とも呼ばれる丘が指呼の間にある。久下前遺跡は、本庄市域では唯一の丘陵地形である緑ゆたかな大久保山を南にのぞみ、水田可耕地である沖積地に接する微高地に立地する。

2 周辺の遺跡と歴史的環境

本庄台地の南半、とくに久下前遺跡周辺の主要な遺跡、とくに弥生時代以降の遺跡にかぎって、ごく簡単にふれることにする。

久下前遺跡周辺の弥生時代遺跡としては、宥勝寺北裏遺跡(7:以下、()内の数字は、第1・2図の遺跡番号と一致する)、北堀前山遺跡(8)、大久保山遺跡(13)、大久保山遺跡浅見山I地区(16)、村後遺跡(15)、山根遺跡(19)、根田遺跡(20)、雷電下遺跡(21)、飯玉東遺跡(22)、今井条里遺跡(31)



1. 久下前遺跡 2. 久下東遺跡 3. 東富田遺跡群 4. 公卿塚古墳 5. 七色塚遺跡 6. 笠ヶ谷戸遺跡 7. 宥勝寺北裏壇輪窓跡 8. 北堀前山遺跡 9. 北堀前山古墳群 10. 東谷遺跡 11. 西五十子古墳群 12. 大久保山寺院跡 13. 大久保山遺跡 14. 塚本山古墳群 15. 村後遺跡 16. 大久保山遺跡浅見山I地区 17. 下田遺跡 18. 観音塚遺跡 19. 山根遺跡 20. 根田遺跡 21. 雷電下遺跡 22. 飯玉東遺跡 23. 鷺山古墳 24. 夏目遺跡 25. 薬師遺跡 26. 薬師元屋舗遺跡 27. 社具路遺跡 28. 今井興訪遺跡 29. 女堀糸里遺跡、四方田・九反田遺跡 30. 後張遺跡 31. 今井糸里遺跡 32. 今井川越田遺跡

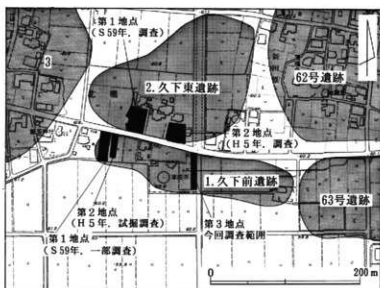
第1図 周辺の主要遺跡分布図

と主な遺跡にかぎっても、弥生時代後期以降、丘陵部をめぐって遺跡数が急激に増加する傾向をしめす(恋河内 2002)。この傾向は、とくに弥生時代後期後半以降顕著であるが、古墳時代前期以降は、沖積地に近接した一帯への本格的な進出という新たな展開がみられるようである。

久下前遺跡の周辺についてみてみよう¹¹⁾。周辺の集落址としては、まず、道路をへだてた同じ微高地上では、北側に久下東遺跡(2)(増田 1985)がある。久下東遺跡では、古墳時代前期とされる住居址が検出されており、久下前遺跡との関係については、さらに検討する必要があるであろう。他に近隣の古墳時代以降の集落址としては、東富田遺跡群(3)、七色塚遺跡(5)、笠ヶ谷戸遺跡(6)、東谷遺跡(10)、下田遺跡(17)、観音塚遺跡(18)があるが、至近の距離にある北堀前山古墳群(9)、大久保山遺跡浅見山I地区(16)、同じ微高地の西方に位置する公卿塚古墳などの古墳群とそれら集

落址との関係についての検討は、今後の大きな課題としてのこされている。

古墳時代後期～奈良・平安時代に関しては、久下東遺跡(2)、東富田遺跡群(3)、七色塚遺跡(5)、東谷遺跡(10)、古川端遺跡、大久保山遺跡(13)、下田遺跡(17)、観音塚遺跡(18)など集落址の例は枚挙にいとまがないが、部分的な調査例が多いこともあり、細かな議論ができる段階にはない。沖積地に面し途切れな



第2図 久下前遺跡(第1～3地点)位置図

がら東西にのびる微高地という地形的条件のもとで興亡をくりかえした集落の展開過程や丘陵部の集落との結びつきについて、今後様々な視角から検討する必要があるであろう。

今回報告する久下前遺跡(1)に関しては、北側の久下東遺跡(2)において、平安時代以降の遺構が検出されていないとはいえ、同一の集落址である可能性はきわめて高いと考えてよいであろう(第2図)。集落を営みうる平坦地のひろがりや、両遺跡をふくむ集落址が全体としてかなりの規模を有することをしめし、また出土遺物からみても、相当の継続性をもった集落址であることがわかる。これまでの調査地点にみる違いは、微高地内の占地空間の在り方に時期的な違いがあることを示唆している。

以上、簡単に周辺遺跡をながめてみた。沖積地、沖積地に沿う低位段丘や微高地、丘陵の3つが織りなす景観の中での、集落と墓域の問題、森林資源、河川資源などをふくむ多様な資源と集落の関係の問題など、様々な問題が課題としてのこされている。

註

- (1) 調査範囲の南縁には、溝状の落ちこみがみられ、南側の現水田域にむかって微高地の肩が大きく削平されていることがわかった。また、溝状の落ちこみをふくめ削平がなされたのは、堆積土や腐蝕のすすんでいない生杭が出ていることなどからみて時期的にごく新しく、調査範囲内の削平部分より南には遺構がみられないことが確認されている。なお、今回の調査範囲の南側の現水田域に関しては、同様の道路拡幅範囲ではあるが、平成13年1月に本庄市教育委員会が試掘調査を実施している。北側の微高地近くをのぞいては、遺物も皆無に近く、遺構もまったくみられなかった。
- (2) 以下、とくに明記しない場合には、各遺跡の報告書および『本庄市史 資料編』、『同 通史編1』(本庄市史編集室編 1976・1986)による。なお、第1・2図は遺跡分布の概略図であり、東富田遺跡群などのように、細かく地点のわかる遺跡をひとまとめにしており、また古墳群に関してはおよその範囲をしめすにとどまる。

III 調査の方法と経過

1 調査の方法

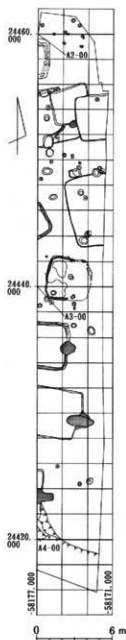
久下前遺跡で検出した遺構は、竪穴住居址、土坑、ピットである。ここでは、とくに住居址の調査方法の基本線を略述することにしたい(第3・4図)。

試掘調査の結果から、今回の調査範囲内全面に住居址が展開することが明らかであった。発掘調査に際しては、業者に委託・実施した座標計算された基準杭にもとづき、調査範囲内全体をおおうグリッドを設定した(第3図)。20×20mの各グリッドを、北から南へA1、A2、A3と呼称し、その各々を2×2mのより小さなグリッドに分割し、その小グリッドを西から東へ00、10、20、30……90、北から南へ00、01、02、03……09、と呼びわけた。あわせて「A1-01」、「A3-28」といった呼称法をもちいた。

調査範囲が細長く幅6mとせまいこともあり、今回の調査では、中グリッドとよぶべき20×20mのグリッドまでしかもちいながったが、さらに20×20mの中グリッドが東西、南北5個ずつで構成する100×100mのグリッドを、今後の周辺域での調査に対処すべく用意した。

調査範囲内は、表土層直下で直接ローム層が露出する状態であったため、遺構確認は比較的容易であった。確認した住居址は、原則的に予想された長軸、短軸あるいは調査区界の東西壁面にそって、まずサブトレンチを開掘し、床面の状態をたしかめ、しかる後覆土全体を掘りさげ精査した。総じて床面の硬化が不規則で局所的であったため、サブトレンチでは、掘り方まで掘り下げなければ床面が確定できない住居址もあった。カマドは、キの字にセクションベルトをもうけ、逐次覆土をとりぞく形で精査した。カマド本体、カマド覆土の土はおおむね採取し、現地にて、念のため最小2.5mm目のフルイによる選別作業をおこなったが、土器細片などをのぞき微細遺物は一切検出できなかった。

遺構の実測図作成には、1/10、1/20の縮尺を適宜もちいた。覆土中の遺物に関しては、細かな土器細片が散漫に出土する傾向がみられたため、床面直上あるいは最下層出土の全形のわかる遺物を測点記録したほかは、セクションベルトによりわかたれた区画ごとに可能な範囲で層位をしるし、とりあげた。住居址掘り方に関しても、床面より上の調査と同じ方法でのぞんだが、いわゆる床下土坑がいちじるしく、掘りあげることに労力の過半をそそがざるをえなかった。実際穴だらけとなった住居址もあり、掘りこみの輪郭が明瞭なもののみ平面図をとり、個別の土層断面図は作成していない。



第3図
グリッド配置図

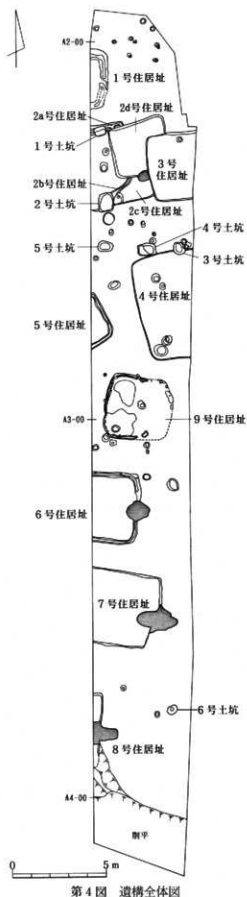
2 調査の経過

平成14年1月7日、調査員、作業員一同現地集合し、器材の搬入、防護柵、発掘調査の表示板の設定やテントの設置などから作業をはじめた。翌8日から重機による表土剥ぎに着手し、9日からは、北端の1～3号住居址から精査を開始した。2・3号住居址は、重複がいちじるしくやや難航したが、1月10日からは4・5号住居址、11日からは6・7号住居址と精査をすすめ、並行して土坑、ピットの検出、精査をつづけていった。なお、1月10日の時点で、基準点、水準点測量に必要な基準杭の設定を委託・実施し、以降は、今回の調査範囲に則したグリッドをもうけ作業をすすめた。

1月17日までは、9号住居址以外のすべての住居址に手をつけた形となったが、図面作成が遅れをとることとなり、図面班を増員し、カマドの精査など細かな作業によりやくとりかかることができた。1月18日以降は、土層断面図、ピット図面作成などこのこした図面を仕上げながら、とくにカマドや掘り方の精査、写真撮影をおこない、住居址の調査を終えていった。なお、壁溝の一部のみのこる9号住居址は、ピットの精査を再度おこなった時点で検出した遺構である。

床面出土の遺物が少ないこともあり、覆土を掘ること自体は比較的容易であったが、いわゆる床下土坑が不規則におびただしく掘りこまれた住居址が多く、また掘り方埋土にも細かな遺物が多数ふくまれたため、床面下の調査には思わぬ時間を要した。

1月30日には、全景写真の撮影を終え、同31日には大半の器材を撤収し、2月1日に残余の図面を仕上げ、調査を終了した。実働日数は、16日である。



IV 遺構と遺物

1 層 序

調査範囲内の遺構は、すべて表土層直下のローム層で確認したため、基本層序は、表土層のⅠ層、古墳～奈良・平安時代の遺構覆土であるⅡ層、ローム層のⅢ～Ⅴ層の4つないしは5つの層に大別できる。ローム層に関しては、とくに深掘して基層を見きわめ層序を確定したわけではないが、ローム層を深く掘りこんだ掘り方をもつ住居址の壁面で、層相の変化が観察できたため、微高地の土層を考える際の参考までに、目についた特徴を略述しておくことにしたい。なお、以下のローム層の区分呼称は、ただ今回の調査にかぎり仮に付したものである。

Ⅰ 層：暗褐色土～灰黄褐色土。台地上に通有の表土層であり、盛土層をふくむ。

Ⅱ 層：暗褐色土。古墳～奈良・平安時代の遺構覆土にのみみられる暗褐色土。この種の暗褐色土が純層をなすことはない。

Ⅲ 層：黄褐色土。質感が、いわゆるソフトロームに近い黄褐色のローム層である。調査範囲全体がこの層あるいはⅣa層の上面まで削平や耕作などにより土壌が流出しており、Ⅳa層とともに上面が遺構の確認面をなす層である。局所的にみられ、最もこのりのよい箇所での層厚は6、7cmである。上下界線が乱れる点からみて、Ⅳa層上部が凍結や水の影響などをうけ柔らかくなったものかもしれない。

Ⅳa層：黄褐色土。感覚的には、立川ローム層上部、「Ⅳ層」などの黄褐色のハードロームと大きな違いのない硬いローム層。層厚は30cm前後である。

Ⅳb層：褐色土。Ⅳa層より微妙に黒みが強い。Ⅳa層との違いはやや粘性をおびることくらいで明確に分層できるかどうか判断できない。上下層との境が、はっきりしない幅20cm前後の帯状の黒みの強い部分である。

Ⅳc層：にぶい黄褐色土層。上位の層とかなり感触が異なり、明らかにシルト化がはじまる層である。微小な礫が少しずつ混じりはじめる。層厚は10cm前後である。

Ⅴ 層：明褐色土。淡い「小豆色」に近い色調のシルト化したローム層である。漸移層のⅣc層をはさんで上位の層とは大きく異なるため、Ⅴ層としておきたい。小礫がⅣc層より目立ち、砂粒も混じりはじめる。下部にゆくほどシルト化がすすむようである。確認したのは住居址の掘り方底面までで、層厚は25cm以上である。

2 古墳～奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 住居址

住居址番号を付した住居址は、1～9号住居址の9軒であるが、2号住居址とした遺構は、4軒の住居址の重複例であり、都合12軒の住居址を調査したことになる。住居址の確認層位は、いずれ

も表土層直下の標準土層III層あるいはIV a層としたローム層上面である。

時期不明の9号住居址をのぞき、原則として北から順番に記載する。掘り方に関しては、土層断面図を一部しか作成しなかったため、掘り方をふくめた土層断面図の一部は、床面以上の覆土の土層断面図と以下の側面図を合成したものである。床下土坑あるいは貼床土坑に関しては、長軸長がおおよそ70cm以上のもののみ番号を付し、帰属する住居址とともにふれることにしたい。なお、床下土坑の深さは、床面から計測した深さである。

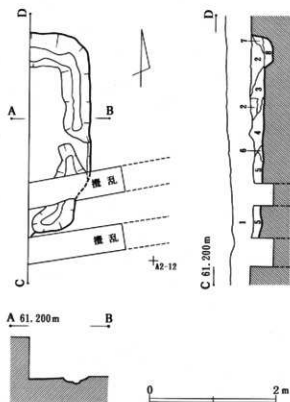
1号住居址

遺構（第5図、図版2） 調査範囲の北縁近く、西壁に接して検出した住居址で、A 2-00~02グリッドに位置する。調査範囲内で検出したのは、住居址東辺のわずかな部分である。また遺構の南側を、東西にはしる2本のガス管によりこわされている。平面形は、隅の丸い方形あるいは長方形であろう。現存長は、南北方向で3.24m、東西方向で0.94mである。主軸方位は不明であるが、東壁はおおむね南北方向である。

覆土は8層にわけられ、おおむね暗褐色土を主とする土である。

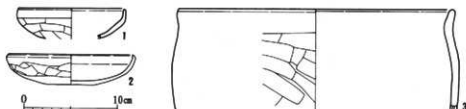
ローム層を掘りこみそのままちいた床面は、やや凸凹しているが、明瞭に硬化している。壁の立ちあがりは比較的ゆるやかである。幅広の壁溝が、2箇所できれながら壁際をめぐっている。壁溝の幅は40~54cm、床面からの壁溝の深さは、20cm前後である。

遺物（第6図、第1表、図版8） 図化した土器は、いずれも覆土中から出土した。



- 1号住居址覆土
- 1層：暗褐色～灰黄褐色土。表土層。
 - 2層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム粒、ローム小ブロックを散在り状にふくむ。
 - 3層：褐色土。2層に近いが、径10cm次のロームブロックをふくむ。
 - 4層：褐色土。3層を主に、大小礫多量にふくむ。
 - 5層：褐色土。2層に近いが、ローム粒が多い。
 - 6層：褐色土。4層に近いが、ローム粒が多い。
 - 7層：褐色土。2層に近いが、ローム粒を塊状にふくむ。
 - 8層：褐色土。ローム粒、ロームブロックを主に暗褐色土をふくむ。

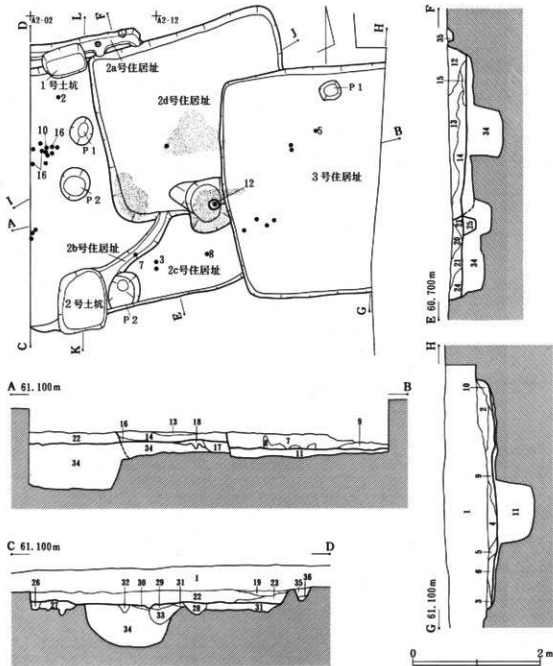
第5図 1号住居址平面図および断面図



第6図 1号住居址出土遺物実測図

第1表 1号住居址出土土器観察表

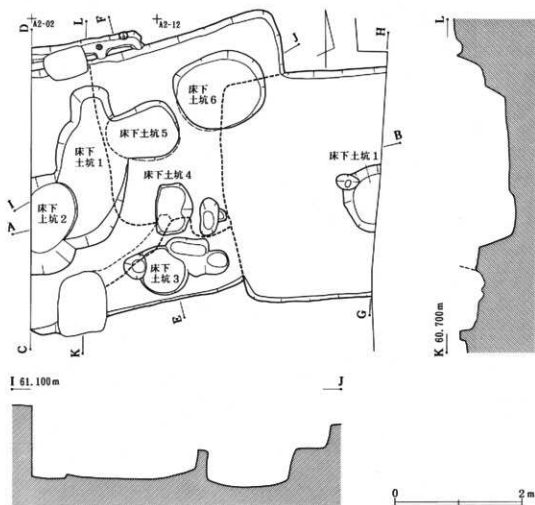
番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	坏	(3.1)	(11.3)		良	B	1/3	下層	外：ナデ、ケズリ
2	坏	3.2	(11.2)		良	B	1/3	上層	外：ナデ、ケズリ 内：煤付着
3	甕	(10.6)	(29.2)		良	A	1/12	下層	外：ナデ、ケズリ



第7図 2・3号住居址平面図および断面図(1)

2号住居址

遺構（第7・8図、図版2・3） 調査範囲の北寄り、A2-03・13グリッド周辺で検出した住居址である。当初、3号住居址と重複する大型住居址と考えたが、東西方向のサブトレンチをまず



2・3号住居址覆土

- 1層：暗褐色～灰黄褐色土。表土層。
- 2層：暗褐色土。暗褐色土を主にロームをふくむ。
- 3層：黄褐色土。ロームを主に暗褐色土をふくむ。
- 4層：暗褐色土。2層に近いが、ローム粒・ローム小ブロックが多い。
- 5層：暗褐色土。暗褐色土を主に、径3cm大のロームブロックを少量ふくむ。
- 6層：黄褐色土。暗褐色土をわずかにふくむローム。
- 7層：暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒・ローム小ブロック、焼土をふくむ。炭化物を微量ふくむ。
- 8層：黄褐色土。大小のロームブロック。
- 9層：暗褐色土。暗褐色土とロームの不均質な混合土。
- 10層：黄褐色土。9層に近いが、ロームが多い。
- 11層：黄褐色土～暗褐色土。暗褐色土とロームが所々斑状にまざる混合土。3号住居址掘り方覆土。
- 12層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム粒、焼土をふくむ。
- 13層：暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒、土器粒、焼土をかなりふくむ。炭化物を微量ふくむ。
- 14層：暗褐色土。13層に近いが、ロームが多い。ロームブロックもふくむ。
- 15層：暗褐色土。14層に近いが、大小のロームブロックを斑状にふくむ。
- 16層：暗褐色土。14層に近いが、焼土、粘土が密集する。
- 17層：暗褐色土。14層に近いが、土器粒、焼土が多い。

- 18層：黒褐色土。暗褐色土と黒褐色土、炭化物の混合土。
- 19層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム、焼土を少量ふくむ。
- 20層：暗褐色土。13層に近いが、ローム粒、焼土が少ない。
- 21層：暗褐色土。14層に近いが、焼土が少ない。
- 22層：暗褐色土。19層に近いが、ローム粒、焼土が多い。
- 23層：暗褐色土。19層に近いが、ローム粒、焼土が多い。
- 24層：明褐色土。ロームブロック、焼土が密集する。
- 25層：暗褐色土。暗褐色土を主にロームを斑状にふくむ。2 b号住居址壁溝覆土。
- 26層：暗褐色土。22層に近いが、やや黒みがつよい。
- 27層：暗褐色土。暗褐色土を主にロームを斑状にふくむ。
- 28層：暗褐色土。暗褐色土を主に土器粒、焼土をふくむ。
- 29層：暗褐色土。暗褐色土を主にロームを多く斑状にふくむ。
- 30層：黄褐色土。ロームを主に暗褐色土を斑状にふくむ。
- 31層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム粒、ロームブロックをふくむ。
- 32層：暗褐色土。22層に近いが、ローム粒が多い。
- 33層：暗褐色土。暗褐色土を主にロームを斑状にふくむ。
- 34層：黄褐色土～暗褐色土。大小ロームブロックを主に、不規則に暗褐色土をふくむ。
- 35層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム小ブロックをふくむ。
- 36層：黄褐色土。ロームを主に暗褐色土をふくむ。

第8図 2・3号住居址平面図および断面図(2)

開掘した結果(土層断面A-B)、袖壁と思われる直立する壁および粘土と暗褐色土、焼土の集塊を3号住居址との重複部分で検出し、また東壁沿いにサブレンチをいれることで、ようやく重複する複数の住居址であることを確認することができた。あらためて精査したところ、東側の住居址を最も新しい段階の住居址とする4軒の重複例で、少なくとも3軒は床面の高さがほぼ同じであることがわかった。

検出した住居址を、古い方から順に2a～2d号住居址とし、2a号住居址から順に記載する。住居内のピット、床下土坑に関しては、帰属が確定できないものもあり、2号住居址全体で通し番号を付し、適宜説明をくわえる。また、出土遺物についても、2号住居址全体でまとめてふれることにしたい。

2a号住居址は、北側の壁溝のみ遺存する住居址である。2b～2d号住居址の床面にくらべ、本住居址の床面は本来30cm以上は高ったことになる。東側は2d号住居址に、南側は2b、2c号住居址、1号土坑によりこわされている。唯一遺存する壁溝は直線的にのび、東側の先端は直角に近く屈曲する。

2b号住居址は、壁、床面、壁溝のいずれも一部のみ遺存する住居址である。2d、3号住居址、2号土坑によりこわされている。2c号住居址との関係は、床面の高さがほぼ等しく微妙であるが、土層断面の観察から、本住居址より2c号住居址の方が新しいと判断した。

本住居址の平面形を唯一確実にしめす南東壁溝はかなり彎曲しており、そのまま残存する南北壁につらなり本住居址の外形をなすするには多少問題がこのころが、ひとまず旧住居の一边を利用し、引きつづき住居が建てかえられた例と考えておきたい。この場合、2b号住居を建てかえ2c号住居をつくった際、床面をそのまま利用したと考えるのが、もっとも無理がない。以上の推定にしたがえば、南北幅が3.5m前後の南東隅が強く丸みをもったかなり不整な方形ないしは長方形の平面形の住居址とみることができる。

壁溝は円弧に近い曲線をえがく。南西部分で壁溝がきれているのは、浅い土坑などにきられているためかもしれないが、確認できていない。

2c号住居址は、2b号住居址と北壁を共有すると考えられる住居址である。したがって、壁は南北壁の一部のみ遺存することになる。壁の一部を1・2号土坑に、遺構東半部分を2d、3号住居址にこわされている。平面形、規模は不明であるが、南北壁がかなり直線的でほぼ平行し、南壁の東端が彎曲していることからみて、南壁東端がそのまま南東隅をなし東壁につらなり、全体で方形あるいは長方形に近い平面形の住居址と推定される。南北方向での長さは、3.91mである。

床面は、たたき締められたように硬化しているが、硬化範囲は南側の2b号住居址壁溝寄りの部分にほぼかざられる。硬化面は、掘り方埋土をそのまま踏み固めたものか、断面観察では貼床層とよびうる薄層は識別できなかった。この床面構築法は、2d、3号住居址も同様である。2d号住居址との重複部分では、2d号住居址南西隅の輪郭にそって硬化面がとぎれており、新旧関係は明瞭である。南半の調査区界西壁寄りの部分は、とくに床面がはっきりせず、また焼土が所々散っていた。

2d号住居址のほぼ中央に、焼土や粘土の集中する部分がみられ、その位置から本住居址のカマドの痕跡と考えたが、2d号住居址の掘り方がかなり深いこともあり、断定できない。

検出したピットは3個で、P1は楕円形に近く、径36～45cm、深さ19cm、P2は円形で、径52cm、

深さは30cm、P 3は楕円形で、長径65cm、深さは59cmである。

19～24層が床面以上の覆土である。暗褐色土を主にロームや焼土などをふくむ土である。掘り方の覆土は、9層にわけられ、いずれもロームと暗褐色土が不規則に混合する土である。なお、床下土坑に関して、土層断面図を作成したのは床下土坑2のみであるが、調査時の所見では、掘り方と床下土坑の覆土とは大きく異なるものであった。

床下土坑1・2は、位置的に2b号住居址にともなう可能性もある。床下土坑1は不整な長楕円形で、長軸長は256cm、深さは73cmである。床下土坑2は楕円形で、最大径が158cm、深さは73cmである。床下土坑3・4は、2c号住居址にともなうものであろう。床下土坑3は円形で、径80cm前後、深さは36cmである。床下土坑4は長方形に近く、長軸長は79cm、短軸長は60cm、深さは46cmである。床下土坑の覆土は、いずれも径5～10cm大のロームブロックおよびローム粒を主に、所々ロームブロック間に暗褐色土をわずかにふくむ土である。

2d号住居址は、2a、2b号住居址の北東側で検出した住居址である。南東部分を、3号住居址によりこわされている。2a～c号住居址をこわして構築されているが、西・南壁は立ちあがりのはっきりせず、南西・北西隅の形状より推定した部分もある。平面形はおおむね方形で、東西方向での長さは3.16m、主軸方向とかさなる南北の長さは3.05mである。主軸方位は、S-10°-Eである。

床面以上の覆土は、12～16層の5層である。暗褐色土を主に焼土、土器粒などが目立つ土である。

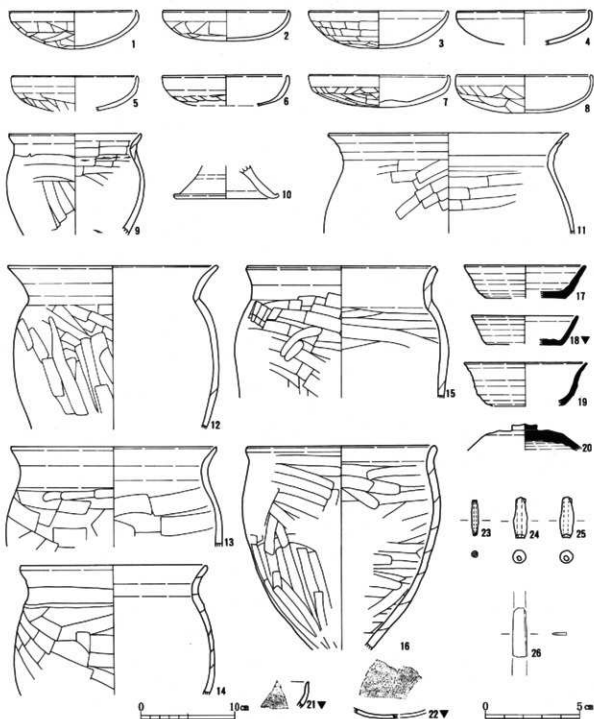
床面は全体にかなり軟弱で、硬化面と明瞭によびうる範囲は、床面のほぼ中央にかざられる。中央および南西隅の2箇所ので、焼土や粘土の集中する箇所がみられた。

南壁側のほぼ中央でカマドの袖および袖臺の一部がのこっていた。カマド東半は、3号住居址によりこわされ、北側部分は、調査当初もうけたサブトレレンチにより掘りぬいてしまった。カマドの掘り方の平面形は微妙に角ばった不整形で、南壁からの奥行きは45cmである。カマド構築材と思われる焼土まじりの粘土は東側にも多少のびるが、この部分は3号住居址の覆土の堆積時にくずれたものとみてよいであろう。カマドの掘り方の形状、袖臺の位置からすれば、南壁中央にもうけられたカマドで、袖臺は東側の袖に設置されたものとみられる。明瞭な燃焼面がみられず、西側の袖にあたる部分の粘土の分布が希薄であったこともあり、全形を明確な形で推定復元することができない。

掘り方覆土は、いずれもロームと暗褐色土が不規則に混合する土である。2b、2c号住居址掘り方覆土との違いを確認しえていないため、同一層として記載した。床下土坑の覆土は、床下土坑1・2と同様に、大小のロームブロックがぎっしりつまり、隙間を暗褐色土がうめっているような状態であった。床下土坑5・6、とくに床下土坑5は、2c号住居址にともなう可能性もあるが、位置的に本住居址の範囲内におさまるため、ここで記載する。

床下土坑5は、かなり不整な楕円形の土坑で、南側の壁はえぐるように掘りこまれている。長軸長は推定で115cm、短軸長は90cm前後、深さは58cmである。床下土坑6も楕円形で、長軸長は142cm、深さは60cmである。

遺物（第9図、第2表、図版8・9） 第9図の2・3・7・8・10は、2c号住居址床面、同図12は2d号住居址のカマド袖臺である。時期的にもかなり幅のある土器が混在して出土しているようである。



第9図 2号住居址出土遺物実測図

23～25は土錘である。23は長さが3.8cm、最大幅0.6cm、24は長さが4.3cm、最大幅1.2cm、25は長さが4.3cm、最大幅1.2cmである。26は刀子の一部かと思われる両端が折損した鉄製品である。現存長5.2cm、幅1.5cm、厚さは0.3cmである。図示していないが、調査区界の西壁近くの床面で、現存長27.5cmの片岩製の厚みのある板石が出土している。石皿片と思われる、磨耗により中央部が薄くなっている。

第2表 2号住居址出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	坏	4.1	13.4		良	B	準完形	2c住下層	外:ナデ、ケズリ
2	坏	3.2	13.4		良	B	準完形	2c住床面	外:ナデ、ケズリ
3	坏	3.9	(12.7)		良	B	1/3	2c住床面	外:ナデ、ケズリ
4	坏	(3.6)	(14.0)		良	B	1/3	2d住下層	外:ナデ、ケズリ
5	坏	(3.7)	(11.6)		良	B	1/3	上・中層	外:ナデ、ケズリ
6	坏	(3.2)	(13.6)		良	A	3/8	2c住下層	外:ナデ、ケズリ
7	坏	(3.4)	(14.9)		良	B	1/3	2c住床面	外:ナデ、ケズリ
8	坏	4.0	14.4		良	B	完形	2c住床面	外:ナデ、ケズリ
9	台付 壺	(10.7)	(14.0)		良	A	1/4	上層	外:ナデ、ケズリ
10	台付 壺 脚	(3.7)		11.2	良	B	脚残存	2c住床面	外:ナデ
11	壺	(10.7)	(25.4)		良	A	1/6	上層	外:ナデ、ケズリ
12	壺	(17.3)	22.5		良	B	1/2	2d住カマド	外:ナデ、ケズリ
13	壺	(10.5)	(22.0)		良	A	1/6	上層	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
14	壺	(13.7)	(20.0)		良	B	1/2	上層	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
15	壺	(13.5)	(20.0)		良	A	1/4	上・中層	外:ナデ、ケズリ
16	壺	(21.6)	(20.0)		良	A	1/8	2c住下層	外:ナデ、ケズリ
17	坏	3.5	(12.9)	(8.4)	良	B	1/4	上層	ロクロ整形、酸化炭焼成 底:回転糸切り
18	坏	3.5	(12.4)	(8.4)	良	E	1/8	2d住廻り方	ロクロ整形 底:ヘラケズリ
19	高台付 坏	(4.6)	13.1	(7.0)	良	E	5/8	2c住下層	ロクロ整形
20	蓋	(2.0)			良	E	1/2	覆土	ロクロ整形
21	坏				良	B		2d住廻り方	内:暗文、22と同一個体
22	坏				良	B		2d住廻り方	内:暗文、21と同一個体

3号住居址

遺構(第7・8図、図版2・3) 調査範囲の北縁寄り、A2—23グリッドを中心に検出した住居址である。東壁側は調査範囲外で、住居址のおおよそ西半分を調査した。2c、2d号住居址を切って構築されている。平面形は方形あるいは長方形である。カマドはおそらく東壁にあるのであろう。現存長は、東西で2.5m、南北で3.62mである。

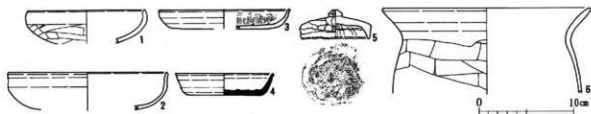
2~10層が床面以上の覆土であり、暗褐色土あるいはロームが主となる土層からなる。

床面は明瞭に硬化しているが、硬化範囲は住居址南半および北壁沿いからひろがる120~180cmくらいの幅の範囲にほぼかぎられる。床面中央、北西隅周辺は硬化が不明瞭で、サブトレンチをいれた調査区界の東壁沿いの北半では、断面観察でも床面らしきものがみられなかった。検出面では、2d号住居址との新旧関係はかなり微妙であったが、土層断面A—Bでの所見にくわえ、床面北半の硬化面が、2d号住居址のなかにまでひろがることから本住居址の方が新しいと判断した。

検出したピットは、北壁寄りのP1のみである。P1はやや丸みのある長方形に近く、長径は32cm、短径は29cm、深さは19cmである。

床下土坑1は、東壁沿い床下で検出した円形の土坑で、径107cm前後、深さは60cm前後である。東壁沿いの部分は床面が不明瞭であるが、土坑上面は貼床に覆われてはいないようである。

遺物(第10図、第3表、図版9) 床面直上から出土した遺物は、5の土師器蓋のみであり、他は覆土の上層出土である。5のつまみは四面をなすように加工され、内面には、沈線による乱雑な「暗文」がみとめられる。



第10図 3号住居址出土遺物実測図

第3表 3号住居址出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	坏	(3.5)	(12.6)		良	B	1/3	上層	外:ナデ、ケズリ
2	坏	4.0	(17.3)		良	A	1/4	上層	外:ナデ、ケズリ
3	坏	2.0	(14.0)		良	B	1/8	上層	外:ナデ、ケズリ 内:暗文
4	坏	2.3	10.5		良	D	3/4	覆土	ロクロ整形底:回転ヘラケズリ
5	蓋	3.1	12.6		良	B	準完形	床面	外:ナデ、ケズリ 内:暗文
6	甕	(9.0)	(22.0)		良	B	1/3	上層	外:ナデ、ケズリ

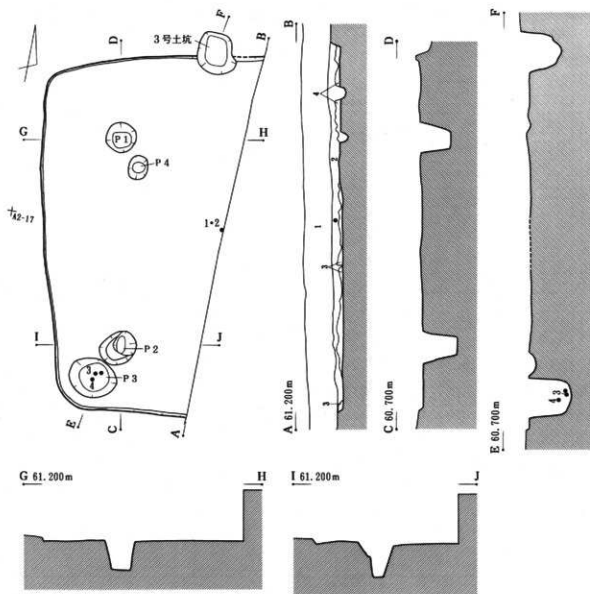
4号住居址

遺構(第11図、図版3) 調査範囲の中央やや北寄り、A2-26・27グリッドを中心に検出した掘り方のみのこる住居址である。東側は調査範囲外で、住居址のおおよそ西半分を調査した。北壁の一部を3号土坑によりこわされている。平面形は隅丸方形あるいは隅丸長方形である。北東-南西に主軸を想定すれば、主軸方向での長さは5.74m、横幅は2.05~3.48mで、主軸方位は、N-10°-W前後と推定される。主軸長が6m前後のやや大型の住居址となろうか。土層断面の観察および面的な観察をくりかえしながら掘り下げたが、下面の凸凹したローム面より上には床面らしきものは一切みられなかった。柱穴の位置からみて炉址の痕跡があってもおかしくないが、焼土が散るような部分もなかった。本来の床面はかなり高い位置にあった可能性がある。掘り方の深さは、8~20cmである。

検出したピットは4個である。P1・2は、主柱穴であろう。P3・4も深さが同じであり、柱穴に類するピットかもしれない。覆土はいずれもロームと暗褐色土の混合土で、柱まわりの裏ごめなどはみられなかった。P3・4も同様である。ピットの平面形は円形あるいは楕円形で、P1は径48cm、深さ70cm、P2は径31~40cm、深さ78cm、P3は長径78cm、短径64cm、深さは82cm、P4は径31~40cm、深さは49cmである。

掘り方覆土は3層で、2層は暗褐色土のやや均質な層、3・4層はロームと暗褐色土の不規則な混合土である。

遺物(第12図、第4表、図版9) 第12図1・2の大型埴は、調査区界の東壁沿いで、掘り方覆土の中層から出土した。同一個体であろう。屈曲部以上と胴部との接合は微妙であり、図上復元においても合成できず、別途図化した。口縁部には、横位の細密なハケメがほどこされ、頸部以下には、一次調整の粗いハケメの後に、ミガキがくわえられている。ハケメが深くほどこされ、器面が凹凸をなしているため、ミガキによってもハケメが消えずそのままのこされている。精緻なつくりであるが、やや軟質の土器である。



4号住居址覆土

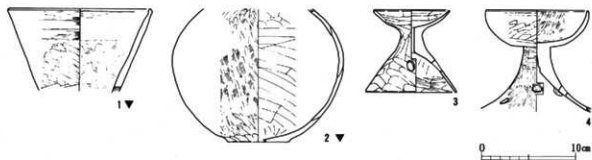
1層：暗褐色～灰黄褐色土。表土層。

2層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム殻・ロームブロックを籠状にふくむ。

3層：黄褐色土。ロームを主に暗褐色土を籠状によく含む。

4層：暗褐色土。2層に近いが、ロームが多い。

第11図 4号住居址平面図および断面図



第12図 4号住居址出土遺物実測図

第4表 4号住居址出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	埴	(8.7)	(15.6)		良	B	1/6	掘り方	外：ナデ、細密なハケ 2と同一個体の可能性あり
2	埴	(14.2)		(6.4)	良	B	1/6	掘り方	外：ハケ、ミガキ 1と同一個体の可能性あり
3	器台	9.6	8.0	(9.6)	良	B	準完形	P 3下層	外：ナデ、ミガキ 内：脚内一部粗いハケ
4	高環	(10.7)	10.8	(11.8)	良	B	脚端欠	P 3下層	内外：ミガキ 円孔上下2段

3の器台、4の高環は、P 3の底面よりやや浮いた状態で、長さ10cm前後の片岩製の折損した棒状礫とともに出土した。3の器台は、ケズリに近いナデ調整後、ミガキがほどこされている。ミガキは軽微で、ナデ痕を全く消しきれていない。4のミガキも軽微であり、ナデよりやや光沢がある程度である。3・4は、胎土、焼成がよく似ている。

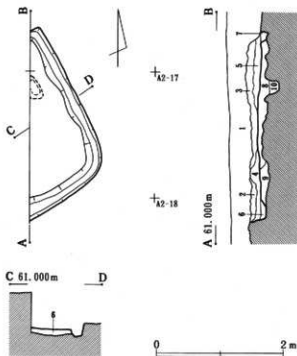
5号住居址

遺構(第13図、図版4) 調査範囲の中央北寄りで検出した住居址で、A 2-06~08グリッドを中心に位置する。調査範囲内で検出したのは、住居址の東半部分である。平面形は、隅の丸い方形あるいは長方形であろう。現存長は、北西-南東方向で2.66m、北東-南東壁をもとに計測した南西-北東方向の現存長は、1.59mである。主軸方位は不明である。

2~4層が床面以上の覆土で、5・6層は壁溝覆土である。おおむね暗褐色土を主とする土であるが、壁溝覆土は、上位の覆土である3・4層とロームの含有量が微妙に異なるのみで、近似した土であった。床面はかなり凸凹しており、全体にいくらか硬い程度である。壁溝が全周するようであるが、床面では確認しにくかった。壁溝には広狭がいろいろある。

7~9層は掘り方の覆土である。掘り方下面は、さらに凸凹しており、小ピット状にくぼむ部分も所々みられた。図示したピットは、掘り方で確認した小ピットである。

出土遺物は、土師器微細片がわずかに出土しているのみである。



5号住居址遺土

- 1層：暗褐色～灰黄褐色土。表土層。
- 2層：暗褐色土。暗褐色土を主にロームをかきまきむ。上部に白色バミスをふくむ。
- 3層：暗褐色土。2層に近いが、径0.5~2cm大のローム小ブロックが多い。
- 4層：暗褐色土。3層に近いが、ロームブロックが少ない。
- 5層：暗褐色土。3層に近いが、ロームが多い。
- 6層：暗褐色土。3層に近いが、ロームが若干多い。
- 7層：暗褐色土。3層に近いが、ロームブロックが大きく多い。
- 8層：黄褐色土。ロームを主に暗褐色土をわずかにふくむ。
- 9層：暗褐色土。6層に近いが、ロームが多く、均質にまじる。
- 10層：黄褐色土。8層に近いが、ローム粒が多く、均質にまじる。

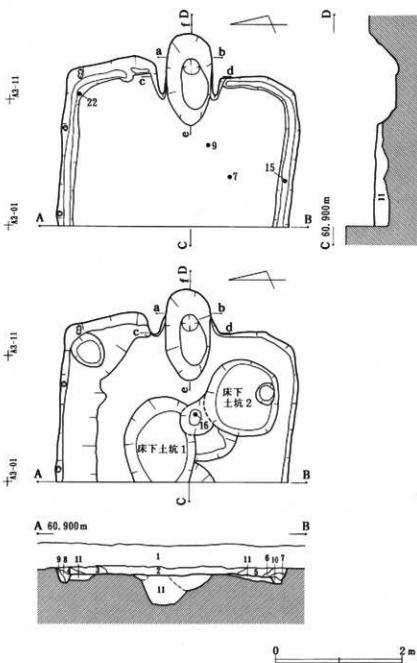
第13図 5号住居址平面図および断面図

6号住居址

遺構（第14・15図、図版4）調査範囲の中央やや南寄りで検出した住居址で、A3-02グリッドを中心に位置する。住居址東側部分のほぼ半分強を調査した。平面形は、隅のやや丸い方形ないしは長方形と推定されるが、東壁はカマドを境にかなり歪である。現存主軸長は3.1m、横幅は3.82mで、主軸方位はN-90°-Eである。

2～7層が床面以上の覆土で、総じて暗褐色土を主にローム粒、ロームブロックなどをふくむかなりしまった土である。8～10層は壁溝覆土であるが、11層とした掘り方覆土とよく似ており、断面観察でも識別がかなり困難であった。

床下土坑のある部分をのぞいて、中央を幅2m前後で掘りのこし、地山のローム層をそのまま床面とし、壁寄りの部分は、掘り方を暗褐色土で埋めて床面をつくっている。硬化範囲は、床面中央にかざられ、壁際の硬化は軽微である。中央がやや高いが、床面はほぼ平坦である。壁溝は東壁の一



6号住居址覆土

- 1層：暗褐色～灰黄褐色土。表土層。
- 2層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム小ブロックをふくむ。
- 3層：暗褐色土。2層に近いが、ロームブロックが大きい。
- 4層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム粒・ローム小ブロックを少量ふくむ。
- 5層：暗褐色土。2層に近いが、焼土をふくむ。
- 6層：暗褐色土。5層に近いが、ローム小ブロックが少ない。
- 7層：暗褐色土。5層に近いが、ローム小ブロックより少ない。
- 8層：暗褐色土。4層に近いが、ローム小ブロックをふくまない。
- 9層：黄褐色土。ロームと暗褐色土の混合土。
- 10層：暗褐色土。暗褐色土を主にローム粒をふくむ。
- 11層：黄褐色～暗褐色土。ロームと暗褐色土が斑状にまじる。所所焼土をふくむ。床下土坑覆土は、ロームブロックが大きい。

第14図 6号住居址平面図および断面図

部をのぞき全周している。

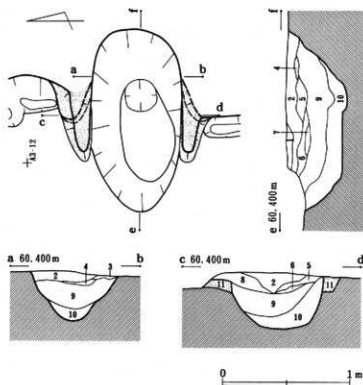
カマドは東壁の中央にあり、全長146cm、幅131cmである。壁を68cm前後掘りこみ、焚口から煙道にかけて全体が卵形に近い掘りこみをもうけている。煙道は45°前後の傾斜で立ちあがり、煙道口にあたる部分の底面には径25cmの浅いくぼみがみられる。卵形の掘りこみの手前側が焚口であろうが、頻りに掻き出しがおこなわれたためか全体に燃焼面の赤化は顕著ではない。左袖は、掘りのこしたロームを芯に、白みの強いシルト質のロームをかぶせてつくられており、右袖は、シルト質のロームのみでつくられている。

カマドの覆土は、11層にわけられる。うまく識別できていないが、第15図7・9・10層は天井崩落土をふくむ層、同11層は袖の構築材である。全形が推定しにくい、次にしるす7号住居址のカマドと形態が類似しており、シルト質のロームでつく

りあげられた同種のカマドとなる可能性が考えられる。天井や壁がくずれ、上部が削平された状態なのであろう。

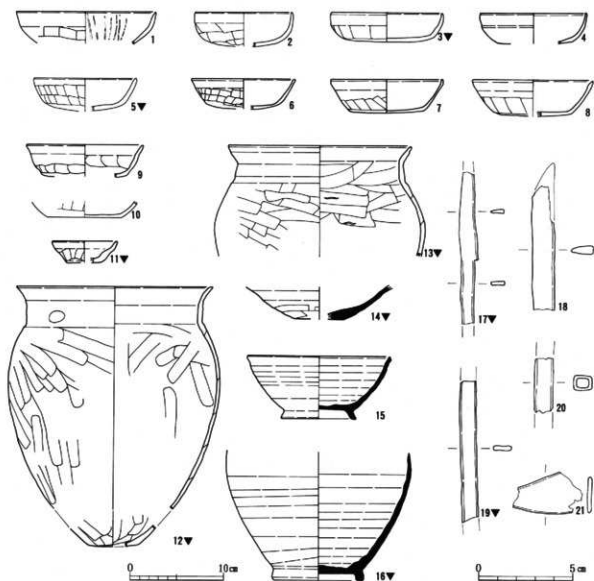
掘り方覆土は、ローム粒・大小のロームブロックを主に暗褐色土をふくむ土である。床下土坑は2基である。床下土坑1は、径120cm前後の円形に近く、深さは50cm前後である。床下土坑2は、床面直下から掘りこまれている。長径134cm以上、短径114cmの楕円形で、深さは48cmである。

遺物(第16・17図、第5表、図版10) 床面で出土した遺物は、第16図15、第17図22である。鉄製品は5点図化した。他に用途不明鉄製品の残欠、鉄滓が数点出土している。17は刃先部分と茎基部を欠損した刀子である。木質部分が若干のこっている。現存長8.1cm、刃部幅0.7~0.9cm、刃の厚さは0.2cm前後である。18も刀子などの利器の破片であろう。現存長6.6cm、刃部幅1.2cm、刃の厚さは0.4cmである。19・20は用途不明の鉄製品である。19は現存長7.4cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm前後である。20は方形中空の管状の鉄製品で、現存長2.9cm、幅1.0×0.8cmである。21は刃先を欠いた利器



- 6号住居址カマド覆土
- 1層: 暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム殻、焼土、炭化物をふくむ。
 - 2層: 暗褐色土。1層に近いが、ロームブロック、焼土ブロックをふくむ。
 - 3層: 暗褐色土。2層に近いが、シルト質のローム粒・ロームブロックを断片にふくむ。
 - 4層: 暗褐色土。2層に近いが、炭化物を少量ふくむ。
 - 5層: 暗褐色土。2層に近いが、シルト質のロームをふくむ。
 - 6層: 暗褐色土。2層に近いが、炭化物がかなり多い。
 - 7層: 暗褐色土。6層に近いが、炭化物が少なく、ロームが多い。とくに両側壁側は、シルト質のロームを多量にふくむ。
 - 8層: 暗褐色土。5層に近いが、焼土が少ない。
 - 9層: 赤褐色土。2層に近いが、焼土ブロックがさらに密集する。
 - 10層: 暗褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のローム、焼土、炭化物を斑状にふくむ。
 - 11層: 灰褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土、焼土、径1~3cm次の土顆粒をふくむ。袖部。

第15図 6号住居址カマド平面図および断面図



第16図 6号住居址出土遺物実測図(1)

であろうか。現存長3.7cm、刃部最大幅2.2cm、刃の厚さは0.2cmである。22の權状石製品は、北東隅のそばの壁溝上で検出した。凝灰岩あるいは砂岩製で、形態は截頭四角錐である。所々剥落、欠損している。上面以外は全面丹念に研磨されている。懸垂用の紐をとおす貫通孔が2箇所ハの字状に抜けており、他に未貫通孔が2箇所にとめられる。高さは4.75cm、上面の幅は2.3×2.4cm、底面の幅は、3.45×3.7cm、重さは84.5gである

7号住居址

遺構（第18～20図、図版5・6） 調査範囲の南半分で検出した遺構で、A3-15・25グリッドを中心に位置する。西側部分は調査範囲外である。平面形は、方形あるいは長方形に近いが、東壁はカマドの境に大きくくいちがっている。重複例とも考えたが、土層断面、床面などには、2軒の住

第5表 6号住居址出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	坏	(3.4)	(15.0)		良	B	1/5	覆土	外:ナデ、ケズリ 内:暗文
2	坏	3.6	(10.4)		良	B	1/3	覆土	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
3	坏	3.0	(12.0)	(6.2)	良	B	1/3	掘り方	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
4	坏	(3.2)	(11.2)		良	B	1/3	カマド	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
5	坏	3.5	(11.0)		良	C	1/3	掘り方	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
6	坏	(3.2)	(11.0)		良	B	1/3	覆土	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
7	坏	3.6	12.0	8.0	良	B	3/4	カマド・下層	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
8	坏	3.9	(13.0)	(6.8)	良	A	1/3	覆土	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
9	坏	3.4	(12.4)		良	B	1/4	下層	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
10	坏	(1.5)		(7.9)	良	B	1/4	覆土	外:ナデ、ケズリ
11	坏	2.2	(6.8)	(3.7)	良	B	1/4	掘り方	外:ナデ、ケズリ
12	甕	(27.5)	21.0	5.0	良	B	1/2	掘り方	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
13	甕	(11.7)	19.7		良	B	3/4	掘り方	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
14	輪	(3.6)		(5.0)	良	E	1/2	掘り方	ロクロ整形
15	高台付埴	6.6	15.4	8.0	良	F	1/2~1	床面	ロクロ整形 底:回転糸切り
16	高台付壺	(13.6)		9.2	良	D	1/2~1	掘り方	ロクロ整形 底:回転糸切り

居址とする証左はみられない。現存主軸長は4.58m、横幅は4.10mで、主軸方位はS-86°-Eである。

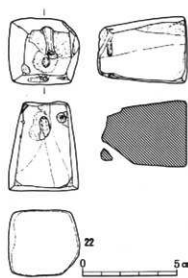
2~19層は、貼床以上の覆土で、19層は貼床層、20層はカマドの覆土である。覆土は、2~9層と10~18層の上下2群の層に大きくわけられる。11~18層には、硬いロームブロックが所々ふくまれ、平らにすると床面と見まがいかねない部分があった。

床面は貼床であるが、貼床層は部分的にしか確認できず、硬化もいちじるしくはない。床面にはやや高低が目立つ。

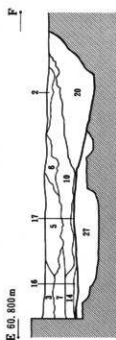
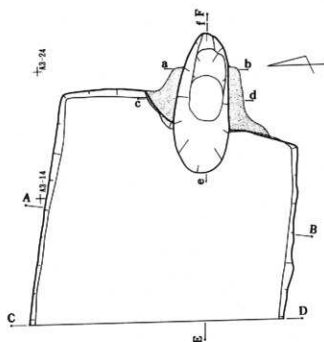
カマドは東壁の中央にあり、全長220cm、壁にシルト質のロームを充填した部分をふくめれば幅は199cmである。壁を100~150cm前後掘りこみ、焚口から煙道にかけて全体が楕円形に掘りこまれている。煙道は45°前後の傾斜をもち、煙道口

にあたる部分は平坦面をなしている。全体に燃焼面自体はそれほど赤化していない。土層断面でも、煙道の天井にあたる部分がもっとも赤化していた。袖から側壁にかけて、両側の住居址の壁は、段差をつけて掘りくぼめられ、シルト質のロームが埋めこまれている。

カマドの覆土は、34層にわけられる。袖から側壁にかけては、多量にふくまれるシルト質のロームが崩落したもののなか、壁や袖なか区別しきれず、本来の形状とはやや異なる点があると思われる。15・16・18~22・25層などは天井崩落土であり、13層もその可能性がある。21・22層はいちじるしく赤化している。煙道天井と思われる18~22層は、厚さ14~24cmで、底面に沿い傾斜しており、ひび割れたまま一気に崩落した模様である。横断面では、煙道および燃焼部の断面形を見きわめきれなかった。崩落した天井直下には、炭化物の層である26・27層が堆積しているが、この炭化物層の下は赤化していないため、二次的な使用面と断定できない。35層は袖にあたる。煙道の状態、カマドの覆土にふくまれる多量のシルト質のロームなどからみて、煙道をふくめ全体がシルト質のロームを主とする土で塗りかためられた堅牢な構造のカマドと考えられる。



第17図 6号住居址出土遺物実測図(2)



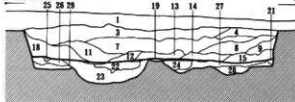
A 60.500m

B



C 60.800m

D



7号住居址出土

- 1層：暗褐色～灰黄褐色土。表土層。
- 2層：暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土をふくむ。
- 3層：暗褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のローム粒・ローム小ブロック、焼土、炭化物を多量にふくむ。
- 4層：暗褐色土。3層に近いが、ローム粒、焼土が少ない。
- 5層：暗褐色土。2層に近いが、炭化物が若干少ない。
- 6層：暗褐色土。5層に近いが、炭化物が多い。
- 7層：暗褐色土。5層に近いが、ローム小ブロックが多い。
- 8層：暗褐色土。5層に近いが、ローム粒、径0.5～1cm大のローム小ブロック、焼土が多い。
- 9層：暗褐色土。8層に近いが、ロームブロックが少ない。

10層：暗褐色土。5層に近いが、シルト質のローム粒・ローム小ブロックが多い。

11層：暗褐色土。暗褐色土とローム粒の均質な混合土。

12層：暗褐色土。11層に近いが、風み強く、ロームが多い。

13層：暗褐色土。12層に近いが、ローム、焼土、炭化物が多い。

14層：暗褐色土。13層に近いが、シルト質のローム大ブロックが集中する。

15層：暗褐色土。暗褐色土とロームの混合土。焼土、炭化物も多量にふくむ。

16層：黄褐色土。ロームを主に、暗褐色土、焼土、炭化物をふくむ。粘床の一部の可能性もあり。

17層：よびい黄褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のロームを塊状にふくむ。

18層：暗褐色土。11層に近いが、ローム小ブロックを若干ふくむ。

19層：暗褐色土。暗褐色土とローム、炭化物の薄層。粘床層。

20層：暗褐色土。カマド覆土。カマド土層断面図を参照。

21層：灰褐色土。シルト質のロームの大ブロック。

22層：黄褐色土。ロームを主に、暗褐色土をふくむ。

23層：暗褐色土。暗褐色土を主に、下部にローム大ブロック集中、焼土、炭化物を少々ふくむ。

24層：黄褐色土。シルト質のロームと暗褐色土の不均質な混合土。焼土、炭化物もふくむ。

25層：暗褐色土。暗褐色土の大ブロック。

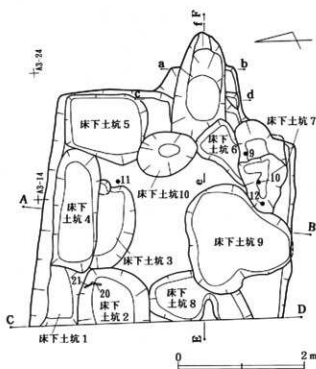
26層：暗褐色土。ロームと暗褐色土の不均質な混合土。

27層：暗褐色土。24層に近いが、暗褐色土が少ない。

28層：暗褐色土。24層に近いが、暗褐色土が多く、炭化物局所的に集中。

29層：灰褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土をふくむ。

第18図 7号住居址平面図および断面図



第19図 7号住居址平面図

床下土坑1は現存長95cm、深さは17cmである。床下土坑2は楕円形に近く、現存長径は88cm、深さは32cmである。床下土坑3は長楕円形で、長径140cm、深さは31cmである。床下土坑4も長楕円形で、長径189cm、深さは35cmである。床下土坑5は長方形で、長径139cm、短径105cm、深さは27cmである。床下土坑6は不整な角ばった形で、現存長72cm、深さは15cmである。床下土坑7は重複する2基の土坑と思われる、カマド脇の壁をえぐって掘りこまれている。現存長147cm、幅75cm、深さは30cm前後である。床下土坑8も重複する土坑で、南北の現存長は152cm、深さは17cmである。床下土坑9も重複する土坑にみえる。南北の長さは150cm、深さは37cmである。

床下土坑10は卵形に近く、長径91cm、短径70cm、深さは33cmである。覆土とともに焼土が集中し、周辺の掘り方覆土にも焼土がかなりふくまれていた。また底面は軽微ながら明確に赤化しており、炉址の一種と考えてよい。調査時の所見では、本土坑の壁は、掘り方覆土中にあり、掘りこみ面は貼床層直下である。カマドの残骸とも考えたが、掘り方中からかなりの量出土した鉄製品や鉄滓など関係する施設の痕跡である可能性もないではない。

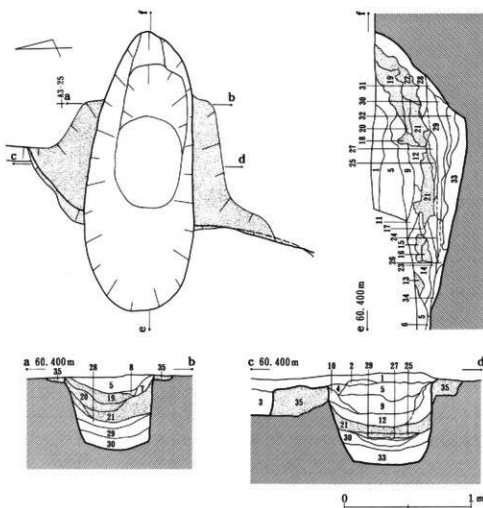
遺物(第21図、第6表、図版10・11) 2・3・5はカマド覆土、1・4・7・8は最下層、9・10・12は床下土坑7から出土した。他にフイゴ羽口破片が数点出土している。

13は土錘で、長さ4.4cm、幅1.6cmである。図化した鉄製品は、13点である。他に覆土、とくに掘り方からかなりの量の鉄片など鉄製品残欠、鉄滓が出土している。14は鐵身が三角形の長釜蓋であろう。三角形の各先端および茎基部を欠損している。現存長6.3cm、現存鐵身幅は2.0cm、茎断面は長方形で幅0.6cm、厚さは0.3cmである。15は鎌の先端部分である。現存長4.6cm、最大幅は2.1cm、背の厚さ0.2cmである。16・17は紡錘車の紡輪である。16は径4.0cm前後、厚さ0.3cm、17は径3.7cm前後、厚さ0.3cmである。

床面上ではピットを検出できなかったが、床下土坑7とした土坑は、いわゆる貯蔵穴の可能性もある。

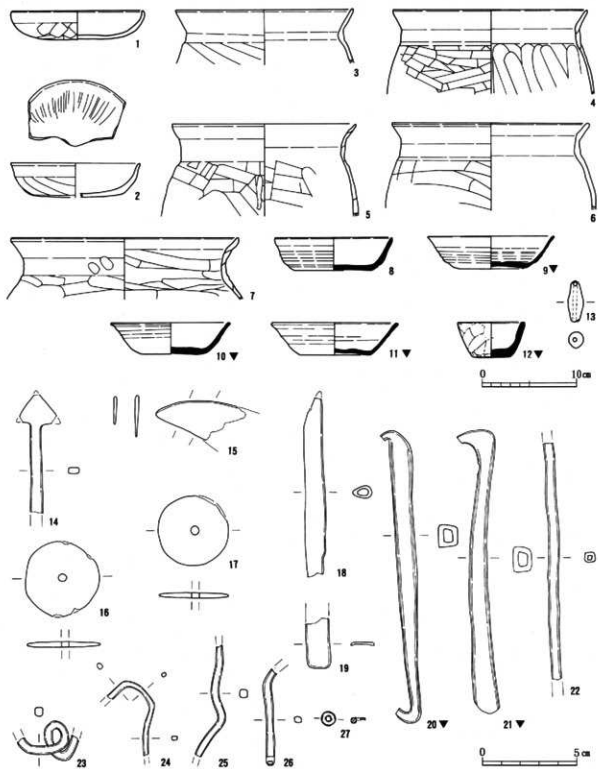
20～29層は、貼床層をのぞいた掘り方覆土である。23層を覆土とする床下土坑2は、貼床層の直下が掘りこみ面である。土坑の口全体が貼床におおわれていない一部の床下土坑のなかには、床面で、黒みの強い落ちこみとして輪郭が確認できるものがあった。床下土坑がないのは、床面中央のわずかな部分である。

床下土坑としたものは、10基である。重複するものも1基としており、実際にはより細かな掘削の過程をへているのであろう。単なる粗掘りの作業単位とするにはあまりに個々形態を保っており、また覆土や掘りこみ面も一様ではない。



- 7号住居址カマド覆土
- 1層：暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒、焼土をふくむ（住居址覆土2層）。
- 2層：灰黄褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土ふくむ。
- 3層：暗褐色土。暗褐色土を主とする住居址内の覆土。
- 4層：暗褐色土。暗褐色土のブロック。
- 5層：暗褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のローム粒・ローム小ブロックを多量にふくみ、焼土をふくむ（住居址覆土10層）
- 6層：にぶい黄褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のロームを散状にふくむ（住居址覆土17層）。
- 7層：明赤褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土、焼土粒、0.5~1cm大の焼土ブロックを多くふくむ。
- 8層：暗褐色土。7層に近いが、暗褐色土が多い。
- 9層：暗褐色土。8層に近いが、黒みが強い。
- 10層：灰黄褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土を所々ふくむ。
- 11層：灰黄褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土、焼土、炭化物を散状にふくむ。
- 12層：赤褐色土。赤化したロームを主に、所々暗褐色土をふくむ。
- 13層：灰褐色土。シルト質のロームのブロック。
- 14層：暗褐色土。暗褐色土を主に、炭化物を多くふくむ。
- 15層：灰褐色土。シルト質のロームを主に、焼土、炭化物をふくむ。
- 16層：暗褐色土。15層に近いが、炭化物が少ない。
- 17層：暗褐色土。14層に近いが、黒み強い。
- 18層：灰褐色土。シルト質のロームを主に、焼土をふくむ。
- 19層：灰褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土ふくむ。
- 20層：灰褐色土。19層に近いが、暗褐色土が散状をなす。
- 21層：灰褐色土。19層とほぼ同じ。
- 22層：赤褐色土。焼土のブロック間に、暗褐色土を散状にふくむ。
- 23層：暗褐色土。暗褐色土とシルト質のロームの混合土。
- 24層：暗褐色土。23層に近いが、焼土が多い。
- 25層：赤褐色土。焼土とシルト質のロームの混合土。
- 26層：黒褐色土。濃集する炭化物に暗褐色土、焼土がまじる。
- 27層：黒褐色土。26層に近いが、炭化物が多い。
- 28層：暗褐色土。暗褐色土、シルト質のローム、焼土の混合土。
- 29層：暗褐色土。28層に近いが、炭化物をふくむ。軟質でしまりが無い。
- 30層：暗褐色土。29層に近いが、焼土が多い。
- 31層：暗褐色土。30層に近いが、シルト質のロームが多い。
- 32層：暗褐色土。30層に近いが、ロームブロックを点々とふくむ。
- 33層：暗褐色土。暗褐色土、シルト質のローム、焼土、炭化物がややもやまとまじる。
- 34層：暗褐色土。33層に近いが、炭化物が少ない。
- 35層：灰褐色土。シルト質のローム大ブロックと暗褐色土の混合土。袖部。

第20図 7号住居址カマド平面図および断面図



第21图 7号住居址出土物実測図

第6表 7号住居址出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	坏	3.0	(14.0)	(6.8)	良	B	1/4	最下層	外：ナデ、ケズリ
2	坏	3.7	(14.0)	(7.0)	良	B	1/4	カマド	外：ナデ、ケズリ 内：暗文
3	甕	(5.8)	(19.0)		良	B	3/8	カマド	外：ナデ、ケズリ
4	甕	(9.7)	(19.6)		良	B	1/5	最下層	外：ナデ、ユビオサエ、ケズリ
5	甕	(8.9)	(20.8)		良	A	1/2	カマド	外：ナデ、ユビオサエ、ケズリ
6	甕	(9.1)	(21.0)		良	B	1/4	中層	外：ナデ、ユビオサエ、ケズリ
7	甕	(6.6)	(24.0)		良	C	1/3	最下層	外：ナデ、ユビオサエ、ケズリ
8	坏	3.5	12.6	8.5	良	B	2/3	最下層	ロクロ整形、酸化炭焼成 底：回転糸切り
9	坏	3.5	13.4	6.8	普通	E	3/5~1	掘り方	ロクロ整形 底：ケズリ
10	坏	3.3	17.7	6.2	普通	D	1/5~1	掘り方	ロクロ整形 底：回転糸切り
11	坏	3.5	(13.4)	4.6	普通	D	1/5	掘り方	ロクロ整形 底：回転糸切り
12	小型鉢	3.8	7.0	4.0	普通	C	完形	掘り方	外：ナデ、ケズリ 底：ケズリ

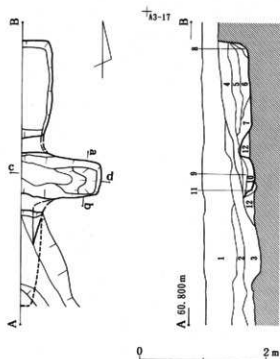
18・20~22は管状、19は板状の用途不明鉄製品である。20・21は床下土坑2覆土中より接した状態で出土した。20は両端が鈎状にまがり、21も一端が屈曲している。20は全長15.6cm、幅1.2×1.0cm、21は現存長15.0cm、幅1.3×1.0cmである。22は紡錘車の紡茎の可能性もある。23~26も用途不明の細い棒状の鉄製品である。断面形が方形であり、23・25などは同一個体であろうか。27は床面から出土した滑石製の白玉で、径0.7cm、厚さ0.3cmである。

8号住居址

遺構（第22・23図、図版6） 調査範囲の北縁で検出した住居址で、A3-07~09グリッドに位置する。調査したのは、カマドの一部をふくむ東壁北半から北壁にかけてのごく小範囲のみである。また、南側は時期の新しい溝に切られ、また削平されている。東壁北半がほぼ直線的で真北をさし、北東隅が直角に近く屈曲することからみて、東に主軸をもつ方形、長方形の住居址と推定される。現存長は、南北で3.24mである。

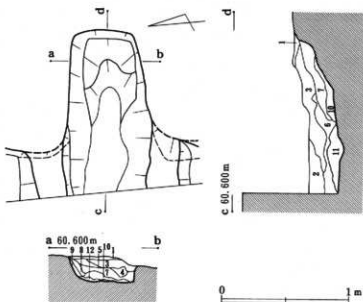
カマドの覆土をのぞく覆土は8層にわけられ、下部にはカマドの崩落、流出土とみられるシルト質のロームや焼土がふくまれていた。地山のロームを直接利用した床面は、おおむね平坦であるが、硬化は明瞭ではない。

カマドは、現存長が129cm、幅126cmである。壁を100cm前後掘りこみ、焚口から煙道にかけて全体が長方形近い形で掘りこまれている。煙道は2段の段をもってつくられており、それぞれ27°、36°の傾斜がある。煙道の口にあたる部分はやや掘りくぼめられ、焚口にむかって細長い燃焼部をなしている。全体に燃焼面自体の赤化はきわめて微弱である。実際やや焼土が密集するかにみえる層(11層)をとり、のぞくと地山が露出する状態であった。袖はシルト質のロームを主とする土でつくられているが、芯らしきものは不明瞭である。カマドの覆土は、12層にわけられる。8・11層などシルト質のロームを主とする土は、袖や壁体の崩落土であろう。7号住居址のカマドと比べると、覆土にふくまれるシルト質のロームも格段に少ないようであった。規模が小さいためか、あるいはカマドのつくり自体異なるためかもしれない。



- 8号住居土壌土
- 1層: 暗褐色~灰黄褐色土。表土層。
 - 2層: 灰黄褐色土。表土層であるが、1層より粘性が強い。
 - 3層: 灰黄褐色土。表土層。2層に砂粒がまじり、黒みが増す。
 - 4層: 暗褐色土。暗褐色土を主に、ローム粒・ロームブロックをふくむ。
 - 5層: 暗褐色土。4層に近いが、ロームブロックが多い。
 - 6層: 暗褐色土。4層に近いが、さらにロームブロックが多く、焼土、炭化物をふくむ。
 - 7層: 褐色土。6層に近いが、ロームブロックが白みがあり、焼土、炭化物が多い。
 - 8層: 暗褐色土。6層に近いが、ロームブロックが多い。
 - 9層: 褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のロームを斑状にふくみ、焼土をふくむ。
 - 10層: 褐色土。暗褐色土を主に、ロームブロック、焼土粒・焼土ブロックをふくむ。炭化物を少量ふくむ。
 - 11層: 灰褐色土。シルト質のロームを主に、暗褐色土をふくむ。
 - 12層: 灰褐色土。11層に近いが、しまっている。植根。

第22図 8号住居址平面図および断面図

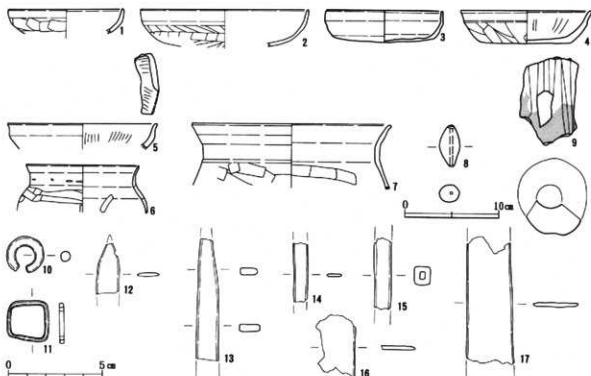


- 8号住居址カマド敷土
- 1層: 暗褐色土。暗褐色土を主に、焼土を多量にふくむ。
 - 2層: 褐色土。暗褐色土を主に、白みがあったロームを斑状にふくみ、焼土をふくむ(住居址覆土9層)。
 - 3層: 褐色土。暗褐色土を主に、ロームブロック、焼土粒・焼土ブロックをふくむ。
 - 4層: 暗褐色土。暗褐色土を主に、焼土を点々とふくむ。
 - 5層: 明赤褐色土。焼土ブロック。
 - 6層: 褐色土。暗褐色土を主に、ロームブロック、焼土粒・焼土ブロックをふくむ。炭化物を少量ふくむ(住居址覆土10層)。
 - 7層: 褐色土。3層と同じ。3層との間に薄い焼土の層あり。
 - 8層: 灰褐色土。シルト質のローム。
 - 9層: 暗褐色土。暗褐色土を主に、シルト質のローム、焼土をふくむ。
 - 10層: 褐色土。3層に近いが、シルト質のロームが多い。
 - 11層: 赤褐色土。シルト質のロームを主に、黄褐色ローム、焼土ブロックをふくむ。
 - 12層: 暗褐色土。9層に近いが、シルト質のロームが多い。

第23図 8号住居址カマド平面図および断面図

遺物(第24図、第7表、図版12) 遺物はいずれも覆土下層出土である。8は土錘で、長さ4.4cm、幅2.1cmである。9はフイゴ羽口破片で、現存長9.1cm、推定径7.2~7.9cmである。外面には溶融した鉄が付着している。図化した鉄製品は8点で、他にも用途不明の鉄片、鉄滓が出土している。10は耳環である。全体に錆化がすすんでおり、円盤状の鉄片と化している。径2.0cm、厚さは0.5cmである。11~17は用途不明の鉄製品である。11は一辺2.2cm前後の方形環状、12・14・16・17も利器、刃物の一部である可能性が考えられる。12は現存長2.6cm、幅1.3cm前後、厚さ0.2cm、17は現存長6.8cm、幅2.4cm、厚さは0.2cm前後である。

13は現存長6.4cm、幅0.9cm、厚さが0.4cm前後と厚みがある。図上部で先細りとなるが、茎の部分になるのかもしれない。15は現存長3.7cm、幅0.9×0.8cmの方形管状の鉄製品である。



第24図 8号住居址出土遺物実測図

第7表 8号住居址出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	坏	(2.5)	(12.1)		良	C	1/3	カマド傍	外:ナデ、ケズリ
2	坏	3.9	(18.0)	(8.0)	良	B		下層	外:ナデ、ケズリ
3	坏	3.4	(12.4)	(11.3)	良	B	1/2	下層	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ
4	坏	3.6	(14.0)	(9.6)	良	B	1/4	下層	外:ナデ、ユビオサエ、ケズリ 内:暗文
5	坏		(16.0)		良	A	1/8	下層	外:ナデ、ケズリ 内:暗文
6	台付壺	(5.6)	(12.2)		良	C	1/4	下層	外:ナデ、ケズリ
7	壺	(6.8)	(21.2)		良	C	1/4	下層	外:ナデ、ケズリ

9号住居址

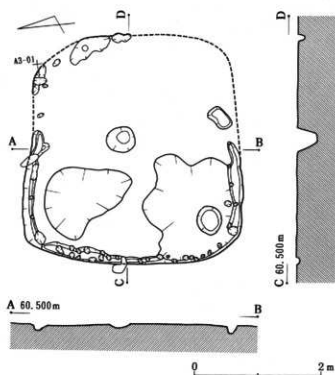
遺構(第25図、図版7) 調査範囲のほぼ中央で検出した住居址で、A 3-10グリッドを中心に位置する。壁溝の一部および掘り方の深く掘りこまれた部分、ピットの下部のみ残存する。残存する壁溝は西半部分で、北壁溝から東側にかけては、壁溝に掘られた小ピットが点々とのこり、かろうじて住居址の輪郭をたどることができるあり様である。平面形はやや胴のはる隅丸方形と推定され、南北の長さは3.48m、東西の推定長は3.7m前後である。

壁溝や掘り方のくぼみは、総じて暗褐色土にロームが多く混じる土を覆土とする。西側の不整形の2つのくぼみは、掘り方の深い部分と考えてよい。壁溝内には、小ピットがほりこまれている。壁溝幅は13~24cm、深さはおおむね10cm以下、小ピットには大小あり、深さは5~16cmである。西壁溝では、壁溝内縁に沿う小ピットと壁溝中央あるいは外縁に沿うかにも見える小ピットが2列、北・南壁溝では、壁溝内縁に沿い一定の間隔をおき小ピットが1列並んでいるようにも見える。おそらく壁溝と一体で壁体を補強する造作の痕跡なのであろう。ピットは3個確認したが、確実に床上構

造と関連すると思われるものはない。遺物は一切出土していない。

(2) 土 坑

土坑は6基検出した。覆土はいずれも暗褐色土を主にロームをふくむ土で、1・2号土坑をのぞけば、住居址覆土と大きな違いはない。調査範囲北半に集中する傾向がみられる。6号土坑はピットと異ならない大きさであるが、ややまとまって遺物が出土したことから土坑とした遺構である。



第25図 9号住居址平面図および断面図

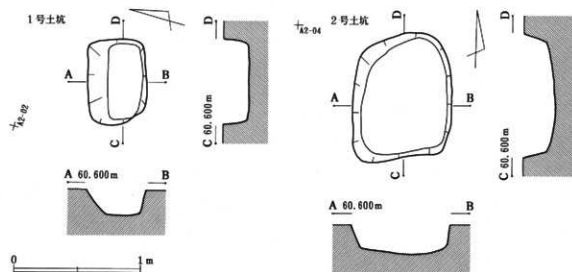
1号土坑

遺構(第26図) 調査範囲の北半、A 2-02グリッドに位置し、2号住居址を切ってつくられた遺構である。

平面形は方形で、長軸長は69cm、短軸長は47cm、深さは20cmである。底面は2号住居址床面より若干深く、ほぼ平坦である。

2号土坑

遺構(第26図) 調査範囲の北半、A 2-04グリッドに位置し、2号住居址を切ってつくられた遺構である。平面形は不整な方形に近く、長軸長は99cm、短軸長は79cm、深さは23cmである。底面に

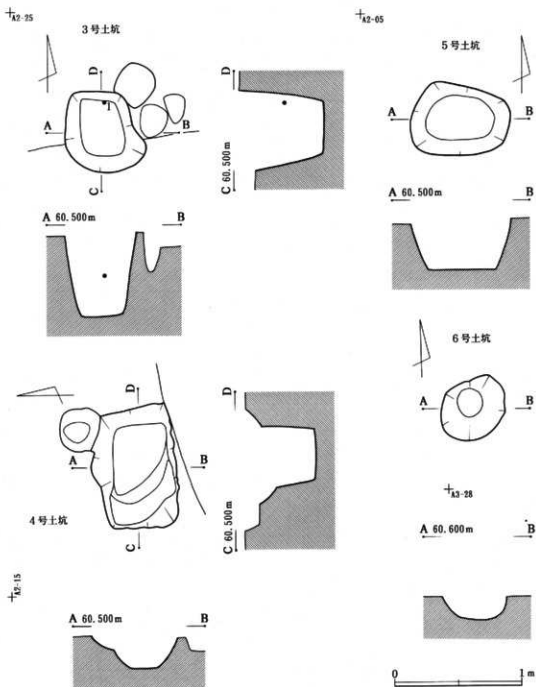


第26図 1・2号土坑平面図および断面図

はやや凹凸がみられる。覆土は、2号住居址覆土より黒みの強い暗褐色土で、確認時にはより大きな不定形の掘りこみとみえた。

3号土坑

遺構(第27図、図版7) 調査範囲の中央北寄り、A2-25グリッドに位置し、4号住居址を切つてつくられた遺構である。平面形は隅丸方形に近く、長軸長は64cm、短軸長は53~65cm、深さは70cmである。底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土を主とする土で、下部にはロームが多くふくま



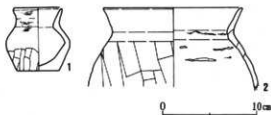
第27図 3~6号土坑平面図および断面図

第8表 3・6号土坑出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	小壺	6.5 (8.4)	5.3 (14.8)	4.4	良	B A	完形 1/4	3号土坑 6号土坑	外:ナデ、ケズリ 外:ナデ

れる。

遺物(第28図1、第8表、図版12) 覆土の半ばより小壺が出土している。口縁部には細線ののこるヨコナデ、胴部下半～底部にケズリ痕をとどめる粗略なつくりの土器である。



第28図 3・6号土坑出土遺物実測図

4号土坑

遺構(第27図、図版7) 調査範囲の中央北寄り、A2-15グリッドに位置し、4号住居址に接する遺構である。平面形は長方形に近く、長軸長は95cm、短軸長は68cm、深さは55cmである。段差をもって掘りこまれているが、底面はほぼ平坦である。

5号土坑

遺構(第27図) 調査範囲の中央北寄り、A2-05グリッドに位置する。平面形は楕円形に近く、長径は79cm、深さは40cmである。底面は平坦である。

6号土坑

遺構(第27図) 調査範囲の南半、A3-17-27グリッドに位置する。平面形は不整形円で、椀状に掘りこまれており、径50cm前後、深さは17cmである。

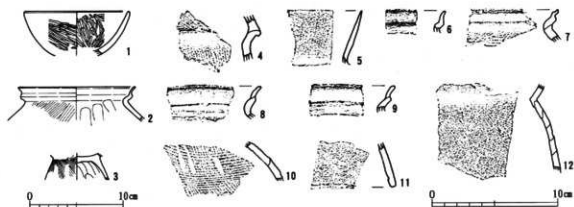
遺物(第28図2、第8表、図版12) 覆土中より壺大形破片がややまとまった状態で出土している。

(3) ビット

遺構外につくられた土坑にみえない大きさの小穴を、ビットと呼称した。覆土は、いずれも暗褐色土を主とする土である。ビットは、調査範囲の北端付近、北半の一部にややまとまる傾向がみられるが(第4図)、規則的な配列をしめすものはみられず、またビット群とよびうるほど集中することもない。

3 遺構外出土遺物

今回の調査では、遺構検出面が表土層直下であったため、文字どおりの意味での遺構外出土遺物は皆無に等しい。第29図(第9表)に図化した資料は、いずれも時期の新しい住居址内より出土した古墳時代前期の土器である。他にS字壺胴部片などが少数出土しているが、ほぼ図化可能な土器を網羅している。4号住居址出土土器をもふくめて器種のかたよりが目立つこと、壺は第29図12の在



第29図 遺構外出土遺物実測図

第9表 遺構外出土土器観察表

番号	器種	器高	口径	底径	焼成	色調	残存率	出土位置	その他の特徴
1	高 坏	(4.7)	(11.4)		良	A	1/4	2 d 住掘り方	内外：ミガキ
2	S 字 甕	(3.5)	(12.5)		良	C	1/4	6 住壁溝	外：ナデ、ハケ
3	S 字 甕	(2.5)			良	B	4/5	6 住壁溝	外：ハケ
4	壺				良	B		2 住掘り方	内傾屈曲口縁 内外：ハケ
5	甗				良	A		6 住掘り方	内外：ミガキ
6	S 字 甕				良	A		2 住掘り方	外：ナデ、ハケ
7	S 字 甕				良	A		2 住下層	外：ナデ、ハケ
8	S 字 甕				良	A		2 住床面	外：ナデ、ハケ
9	S 字 甕				良	A		8 住掘り方	外：ナデ、ハケ
10	S 字 甕				良	A		7 住最下層	外：ハケ、ヘラ痕
11	S 字 甕				良	E		2 d 住掘り方	外：ハケ
12	ハケ				良	A		7 住最下層	内外：ハケ 他に同一個体片多

米のハケ甕をのぞき、S字甕が大半であること、S字甕には、時期差と思われる形態の違いがみられること、西方地域に由来する内傾屈曲口縁の壺がみられることなど問題点もないではない。わずかな資料ではあるが、本遺跡の時期的な上限を示唆するとともに、古墳時代前期の土器様相の一端をしめす資料であろう。

V ま と め

前年9月におこなった試掘調査の結果から、今回の調査地点についての情報がある程度えていたものの、しばしば体験することではあるが、実際発掘調査をおこなってみると、やはり予想にたがう様々な問題に直面することとなった。今回の調査で出会った多岐にわたる問題点にひとつひとつ答える余裕はないが、そのうちの2、3について、今後の調査のために書きとめておくことにしたい。

まず、久下前遺跡の集落としての開始時期についてであるが、4号住居址出土土器がその時期を示唆する資料である。4号住居址は掘り方のみ遺存した住居址で、出土土器は掘り方覆土出土の大型埴、支柱穴脇のピットより出土した器台、高坏のみである。したがって、細かな位置づけはできないが、器台、高坏に関しては、ともにミガキが軽微であり、ナデ調整が顕著であること、加えて高坏は、丈高の器形、中実に近い脚上端のつくり、いわゆる千鳥の穿孔などから、古墳時代前期後半をさかのぼるとは思えない。調査区界の壁中より出土した大型埴も同様の時期と考えてよい。大型埴、器台、高坏という組み合わせは、住居址出土土器としてはやや特異である。

量的にはわずかであるが、遺構外出土土器も考慮する必要がある。遺構外出土土器についてはすでに略記したが、入念なミガキ調整の高坏坏部片がみられること、甕では、1点をのぞき、いわゆるS字甕ばかりであること、S字甕は口縁部形態およびヨコハケの有無などの胴部調整手法において多様であることなどの諸点が指摘できる。S字甕の既往の編年案がそのままでは適用できない地域であるとはいえ、遺構外出土土器は、古墳時代前期段階において、遺跡全体が4号住居址の時期のみに限定されないことを示唆する。

さらに3・6号土坑出土土器も問題になる。3号土坑の小壺は位置づけがむつかしいが、底部外面の粗雑なケズリからみて、古墳時代中期に属する可能性が高い。6号土坑も同じような時期であろう。前期からの継続性を確認することはできないが、少なくとも古墳時代前・中期と久下前の地に人々の痕跡がこのこされたことには留意すべきである。

古墳時代後期以降については、2・3号住居址の段階と6～8号住居址の段階に大きく2つにわけて考えることができる。細かな議論は到底できないため、以下問題点と簡単な所見のみ書き添えておく。

2・3号住居址の場合、重複がいちじるしいこともあり、遺物にも時間幅があるように見うけられる。2a号住居址から2d号住居址へ、最新の3号住居址へといたる新旧関係をえたが、土層断面の観察でも新旧の判定がむつかしかったため、問題が全くないとはいえない。出土土器に関しては、覆土上層出土としてとりあげた遺物を一応除外して考えるなら、2号住居址出土土器の様相は、ある程度共通した内容をしめすようである。土師器坏は、口縁部が短く内屈するかに見えるものをふくむが、大半は内屈するというよりわずかに内彎する形態であり、2c号住居址床面出土の坏はほぼ後者にかざられる。確実にともなう甕は、2d号住居址のカマド袖甕のみである。この甕は、最大径が胴部中位にあり、胴部外面にはナナメ、ヨコのケズリがほどこされている。土師器坏と甕では多少時期差があるとするとするなら、そこに2c、2d号住居址間の時間的な懸隔をみとめるこ

ともできそうである。

3号住居地で床面より出土したのは、土師質の蓋のみである。かえりのない段階の須恵質蓋の模倣であろうか。

6～8号住居地は、同じような間隔をへだててカマドの方位をそろえて営まれた住居地であり、遺構面でも同じような段階の住居地であることが推定できる。シルト質のロームで固めたカマドの構造が類似しており、6・7号住居地では床下土坑が多い点にも共通点がみとめられる。また、鉄製品が掘り方覆土をふくめて多数出土していることも共通する。図化したのは鉄製品やフイゴ羽口破片の一部であり、図化していない鉄片、鉄滓、フイゴ羽口小破片などが他にも相当数ある。7号住居地床下土坑10は、坑底が炉のように被熱赤化していた。出土した鉄製品や鉄滓と関連する施設の痕跡とも考えたが、床下土坑が被熱している例はままたり、あらためて検討する必要がある。

6～8号住居地出土土器は、6号住居地覆土上層から出土したやや雑多な土師器環をのぞけば、おおむね口径の似た平底の土師器環、いわゆるコの字甕、須恵器では比較的直線的に立ちあがる環、高台付塊などで構成されるようである。

当該期についてのこれまでの研究成果によれば（井上 1986、赤熊 1988、小沢 1996、田中・末木ほか 1997など）、2・3号住居地出土土器がおおよそ7世紀第4四半期から8世紀第1四半期、あるいは7世紀末から8世紀初頭にかけて、6～8号住居地出土土器が9世紀代、さらに9世紀後半あたりに位置づけることができようか。

今回の調査はごくかぎられた範囲の調査ではあったが、古墳時代前期から中期へ、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて、断続的ながら継続する集落地の一端をあきらかにすることができたかと思う。周辺の集落地との関係の問題、権状石製品などと呼ばれる石製品やその他の遺物の問題などふれることができなかったが、ひとまず筆をおくことにしたい。

末筆ながら、かぎられた時間の中での発掘調査、報告書の作成作業に様々な形でご協力、ご助言を賜った多くの方々から御礼申し上げる次第である。

引用文献および主要参考文献

- 赤熊浩一 1988 『将監塚・古井戸—古墳・歴史時代Ⅱ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第71集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1994 『金井遺跡B区』、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第146集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 井上唯雄 1978 『群馬県下の歴史時代土器』『群馬県史研究』第8号、群馬県
- 井上尚明 1986 『将監塚・古井戸—古墳・歴史時代Ⅰ—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 市川 修 1977 『田中前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書第32集、埼玉県遺跡調査会
- 岩瀬 譲 1998 『地神／塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩田明広 1998 『今井条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第192集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 梅沢太久夫・石岡憲雄・浅野晴樹ほか 1981 『六反田』大里郡岡町町六反田遺跡調査会
- 太田博之・佐藤好司 1991 『本庄遺跡群発掘調査報告書V—公卿塚古墳—』、本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集、本庄市教育委員会
- 大原道則ほか 1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第199集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小川貴司・橋本博文 1980 『土器の分類と編年』『大久保山Ⅰ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告1、早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 小澤正人 1996 『古墳時代後期から平安時代の集落の変遷』『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4、早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 恋河内昭彦 1990 a 『根田遺跡』児玉町文化財調査報告書第12集、児玉町教育委員会
- 1990 b 『雷電下遺跡—B・C地点—』児玉町文化財調査報告書第13集、児玉町教育委員会
- 2002 『児玉地方の弥生土器』埼玉土器観会第20回資料
- 小久保 徹・柿沼幹夫ほか 1978 『東谷・前山・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集、埼玉県教育委員会
- 駒宮史朗・宮崎由利江ほか 1977 『中堀・耕安地・久城前』埼玉県遺跡発掘調査報告書第15集、埼玉県教育委員会
- 埼玉県教育局文化財保護課 1975 『埼玉県遺跡地図・埼玉県遺跡地名表』埼玉県教育委員会
- 酒井清治 1984 『台耕地Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1987 a 『埼玉県の須恵器の変遷について』『埼玉の古代窯業調査報告』埼玉県立歴史資料館
- 1987 b 『武蔵国における須恵器年代の検討』『研究紀要』第9号、埼玉県立歴史資料館
- 佐々木幹雄 1993 『第3章 各説 第1節 古代』『大久保山Ⅱ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告2、早稲田大学本庄校地文化財調査室
- 佐藤好司・増田一裕 1989 『諏訪遺跡(B地点)・久城前遺跡(B地点)発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第15集、本庄市教育委員会
- 篠崎 潔 1990 『皂樹原・楡下遺跡Ⅱ』皂樹原・楡下遺跡調査会

- 1991 『皂樹原・楡下遺跡Ⅲ』皂樹原・楡下遺跡調査会
- 1992 『皂樹原・楡下遺跡Ⅳ』皂樹原・楡下遺跡調査会
- ・平田重之 1989 『皂樹原・楡下遺跡Ⅰ』皂樹原・楡下遺跡調査会
- 鈴木徳雄 1983 『古代北武蔵における土師器製作手法の画期』『土曜考古』第7号、土曜考古学研究会
- 1984 『いわゆる北武蔵系土師器坏の動態—古代武蔵国における土師器生産と交易—』『土曜考古』第9号、土曜考古学研究会
- 1982 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第1集、児玉町教育委員会
- ・市川淳子ほか 1983 『阿知越遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第2集、児玉町教育委員会
- ・———ほか 1984 『阿知越遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第3集、児玉町教育委員会
- 鈴木秀雄・富田和夫 1982 『伴六』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第11集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋一夫 1975 『国分式土器の細分・編年試論』『埼玉考古』13・14、埼玉考古学会
- 田口一郎 1981 『S字状口縁台付甕の分類と編年』『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 立石盛詞ほか 1982 『後張一本文編・図版編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 1983 『後張一本文編・図版編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明・末木啓介ほか 1997 『中畑遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 利根川章彦 1982 『古墳時代集落構成の一考察』『土曜考古』第5号、土曜考古学研究会
- 1999 『折原石道遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第225集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田和夫 1997 『関東西部—武蔵国を中心に—』『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会
- ・赤熊浩一 1985 『立野南・八幡太神南・熊野太神南・今井遺跡群—一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 中沢 悟・大江正行 1981 『清里・陣場遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 長谷川 勇・石橋桂一ほか 1985 『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集2分冊、本庄市教育委員会
- ・——— 1987 『社員路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊、本庄市教育委員会
- 坂野和信 1988 『和泉式土器の様相—竈導入期の土器群—』『本庄市立歴史民俗資料館紀要』第2号、本庄市立歴史民俗資料館
- 福田 聖 1997 『関東地方出土の古代権衡資料』『研究紀要』第13号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- ほか 1998 『末野遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第196集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 深澤敦仁 1998 『上野における土器の交流と画期』『庄内式土器研究』XVI、庄内式土器研究会
- 星野達雄 1977 『いわゆる国分式土器について』『原始古代社会研究』3、校倉書房
- 1978 『律令制と商品生産の展開』『法政大学大学院紀要』創刊号、法政大学大学院
- 細田 勝・富田和夫ほか 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集、埼

玉泉埋蔵文化財調査事業団

- 本庄市史編集室編 1976 『本庄市史 資料編』本庄市
 ————— 1986 『本庄市史 通史編Ⅰ』本庄市
 ————— 1989 『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市
- 増田逸朗・小久保 徹ほか 1977 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集、埼玉県教育委員会
 ————— 小久保 徹・柿沼幹夫ほか 1979 『下田・諏訪』、埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集、埼玉県教育委員会
 ————— 駒宮史朗ほか 1979 『雷電下・飯玉東』埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集、埼玉県教育委員会
 ————— 坂本和俊ほか 1986 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部史編さん室
- 増田一裕 1985 『本庄遺跡群発掘調査報告書—久下東遺跡・遺構編—』本庄市埋蔵文化財調査報告第7集、本庄市教育委員会
 ————— 1987 a 『本庄住宅団地内遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第11集、本庄市教育委員会
 ————— 1987 b 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集、本庄市教育委員会
 ————— 1987 c 『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第10集、本庄市教育委員会
 ————— 1989 a 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第14集、本庄市教育委員会
 ————— 1989 b 『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集第2分冊、本庄市教育委員会
 ————— 1990 a 『諏訪・久城前・久城往来北遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第17集、本庄市教育委員会
 ————— 1990 b 『山根遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第18集、本庄市教育委員会
 ————— 1992 a 『今井諏訪遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第21集、本庄市教育委員会
 ————— 1992 b 『女堀川条里今井地区・前田甲遺跡発掘調査報告書—遺構編—』本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第1分冊、本庄市教育委員会
 ————— 1995 『前田甲遺跡発掘調査報告書—遺物編—』本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第2分冊、本庄市教育委員会
 ————— 1996 『社具路遺跡第9地点発掘調査報告書』本庄市遺跡調査会報告第5集、本庄市遺跡調査会
 ————— 1997 『市内遺跡発掘調査報告書—西富田地区編—』本庄市埋蔵文化財調査報告第22集、本庄市教育委員会
- 大和 修 1983 『若宮台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第28集、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 若狭 徹 1990 『群馬県における弥生土器の崩壊過程』『群馬考古学手帳』Vol. 1、群馬土器観会

圖 版



久下前遺跡第3地点全景（南より）



1号住居址完掘状況（東より）



2・3号住居址全景（西より）



2号住居址遺物出土状況（1）（南より）



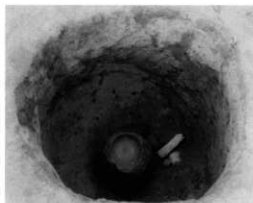
2号住居址遺物出土状況（2）（北より）



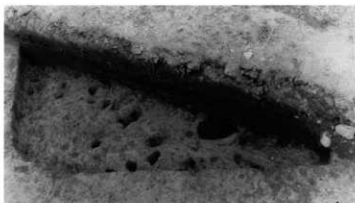
2・3号住居址完掘状況（西より）



4号住居址完掘状況（西より）



4号住居址P3遺物出土状況（南東より）



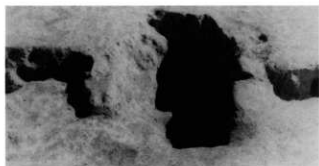
5号住居址完掘状況（北東より）



6号住居址全景（西より）



6号住居址完備状況（西より）



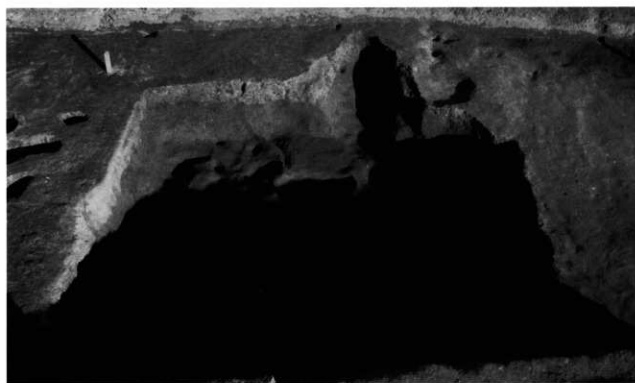
6号住居址カマド（西より）



6号住居址権状石製品出土状況（西より）



7号住居址全景（西より）



7号住居址完掘状況（西より）



7号住居址カマド（西より）



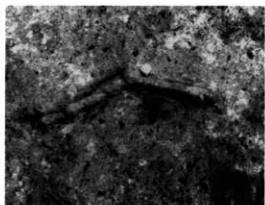
7号住居址カマド完掘状況（西より）



7号住居址カマド土層断面（1）（南より）



7号住居址カマド土層断面（2）（西より）



7号住居址掘り方鉄製品出土状況（西より）



8号住居址完掘状況（南より）



8号住居址カマド（西より）



8号住居址土層断面（東より）



9号住居址完掘状況（西より）



1号住居址 1



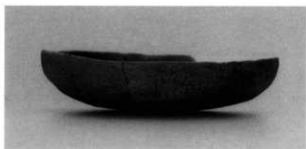
1号住居址 2



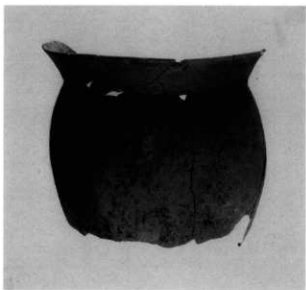
2号住居址 1



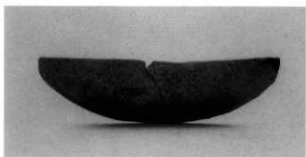
2号住居址 10



2号住居址 2



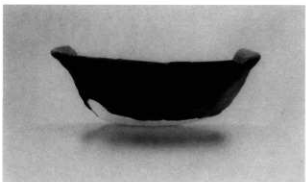
2号住居址 12



2号住居址 3



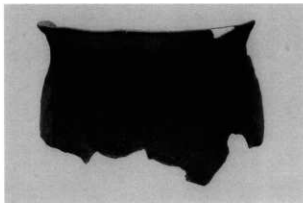
2号住居址 8



2号住居址 19



2号住居址 20



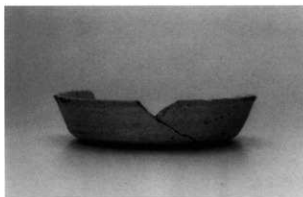
2号住居址 14



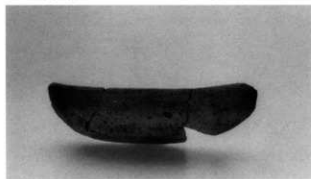
2号住居址 23



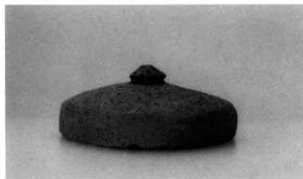
3号住居址 3



3号住居址 4



3号住居址 2



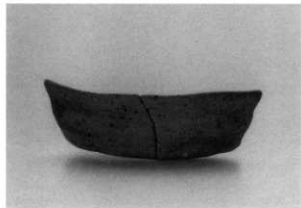
3号住居址 5



4号住居址 3



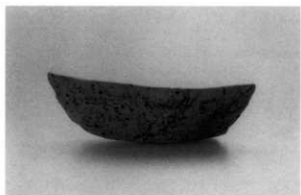
4号住居址 4



6号住居址 9



6号住居址 7



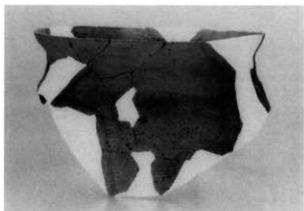
6号住居址 8



6号住居址 15



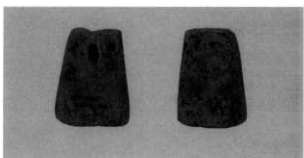
6号住居址 12



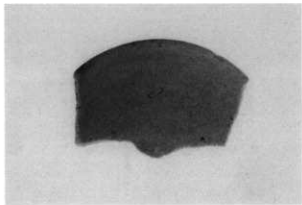
6号住居址 13



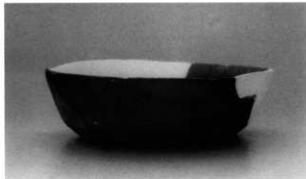
6号住居址 16



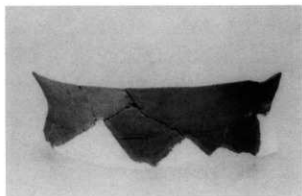
6号住居址 22



7号住居址 2



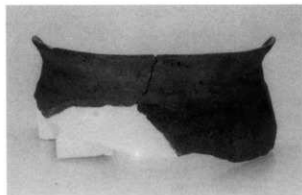
7号住居址 8



7号住居址 3



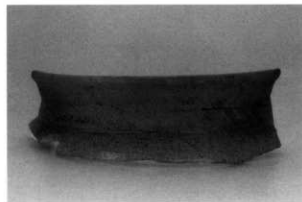
7号住居址 9



7号住居址 6



7号住居址 10



7号住居址 7



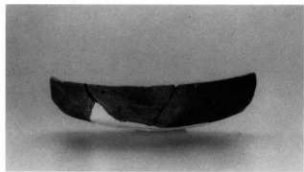
7号住居址 11



7号住居址 12



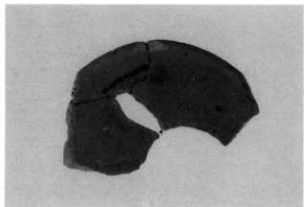
7号住居址 13



8号住居址 1



8号住居址 3



8号住居址 4



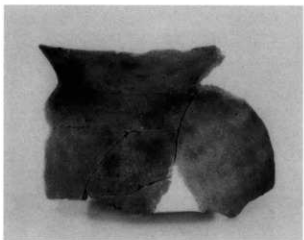
8号住居址 8



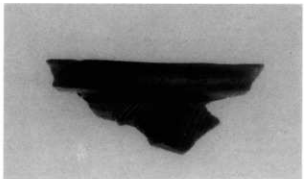
8号住居址 9



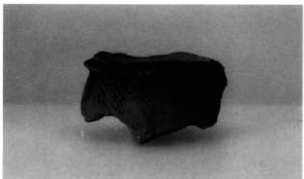
3号土坑 1



6号土坑 2



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな	くげまいいせきだいさんちてんはつつちょうさほうこくしょ							
書名	久下前遺跡第3地点発掘調査報告書							
副書名	市道8501号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ	本庄市埋蔵文化財調査報告 第25集							
執筆・編集者	松本 亮・町田 奈緒子							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3-5-3 本庄市役所内 TEL 0495-25-1186							
発行年月日	2002(平成14)年3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号	′′′	′′′			
くげまいいせきだいさんちてん 久下前遺跡第3 地点	さいたまひんばん 埼玉県本 庄市大字 北堀1311の 一部	112119	53-065	36′ 13′ 7″	139′ 11′ 10″	2002.01.07 2002.02.01	260	道路改良 工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
久下前遺跡第3 地点	集落址	古墳、奈良・平安 時代		竪穴住居址9軒 土坑6基 ピット		土師器、須恵器、土製 品、石製品、鉄製品		残存状態 の良好な 集落址。 鉄製品が 多い。
	散布地	縄文				石器		

本庄市埋蔵文化財調査報告 第25集

久下前遺跡第3地点発掘調査報告書

—市道8501号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

平成14年3月25日 印刷

平成14年3月29日 発行

発行 本庄市教育委員会
埼玉県本庄市本庄3-5-3

印刷 朝日印刷工業株式会社
群馬県前橋市元総社町67
